河内名所圖會

三

河内名所圖會卷之四目錄

志紀郡

當宗神社　妙善堂　木槌樹　土師寳址　塔古礎
允恭天皇陵　天穗日命ノ社　二本杉　龍池　八角冢
道明尼寺　天満宮　藥師堂　本堂　太子堂　鎮守　硯清水　龍吟水　菅神廟碑　三社神祠　八角祠　白石丈祠　神寶　名產糯
厅足羽川
市邊墓
伴林氏神社
新大和川
家原慶寺

國府

孝女衣縫墓
舟橋水仙花
築留
志貴神社
黑田神社
小山團扇
柏原清水
總社
志疑神社
三好城趾
木本干飄　近江名產

丹南郡

葛井寺　本堂　不動堂　菩薩堂　影向石　鐘樓　二王門　紫雲石燈籠　業平第　什器
葛井寺戰場
長野神社
沙門慶俊

内閣文庫

満願寺　仲哀天皇陵　仁賢天皇陵　野中寺
観音堂　地藏堂　経藏　太子開仰井　揚枝井
鎮守　瑪瑙三石　古礎
埴土阪　野中神祠　羽曳山同野　辛國神社
大津神社　櫟本神社　丹比野　丹比神社
萱生神社　荒陵　河内鍋　日高臺古蹟
油淵　大野關趾　狹山神社　狹山堤神社
名産蓴菜　東餘下川　西餘下川　狹山池

丹北郡

雄畧天皇陵　忠臣隼人墓　阿保親王故墟　親王池
來目皇子墳　天滿宮　柴籬宮　廣庭神祠
田坐神社　酒屋神社　川邊橋　樟本神社
守屋城趾　志紀長吉神社　凡破　中臣須牟地神社
阿麻美許曽神社　布忍莊　布忍川

八上郡

丹比行宮　金岡故居　金岡神祠　金岡淵
須牟地神社　名産蓮

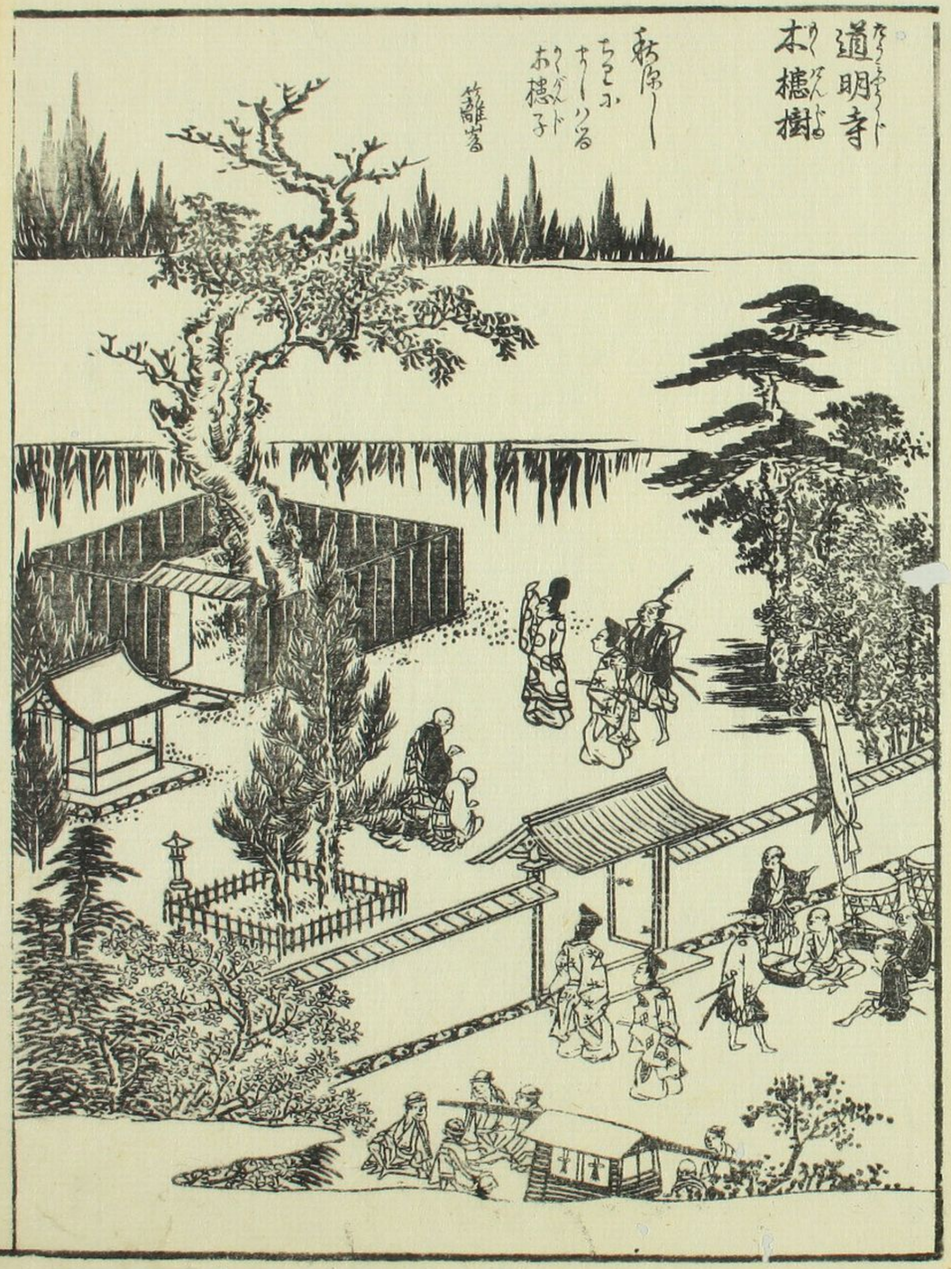
澁川郡

澁川神社　龍華寺古蹟　跡部神社　真觀寺
亀井　勝軍寺　本堂　觀音堂　神妙椋　鎮守
什寶　守屋墳　馬蹄石　額
守屋頸濯池　顯證寺　蓮如松　含月亭
麟角堂　久寶寺城墟　許麻神社
伊賀々川　龍眼泉　横野神社　觀音院　横野堤

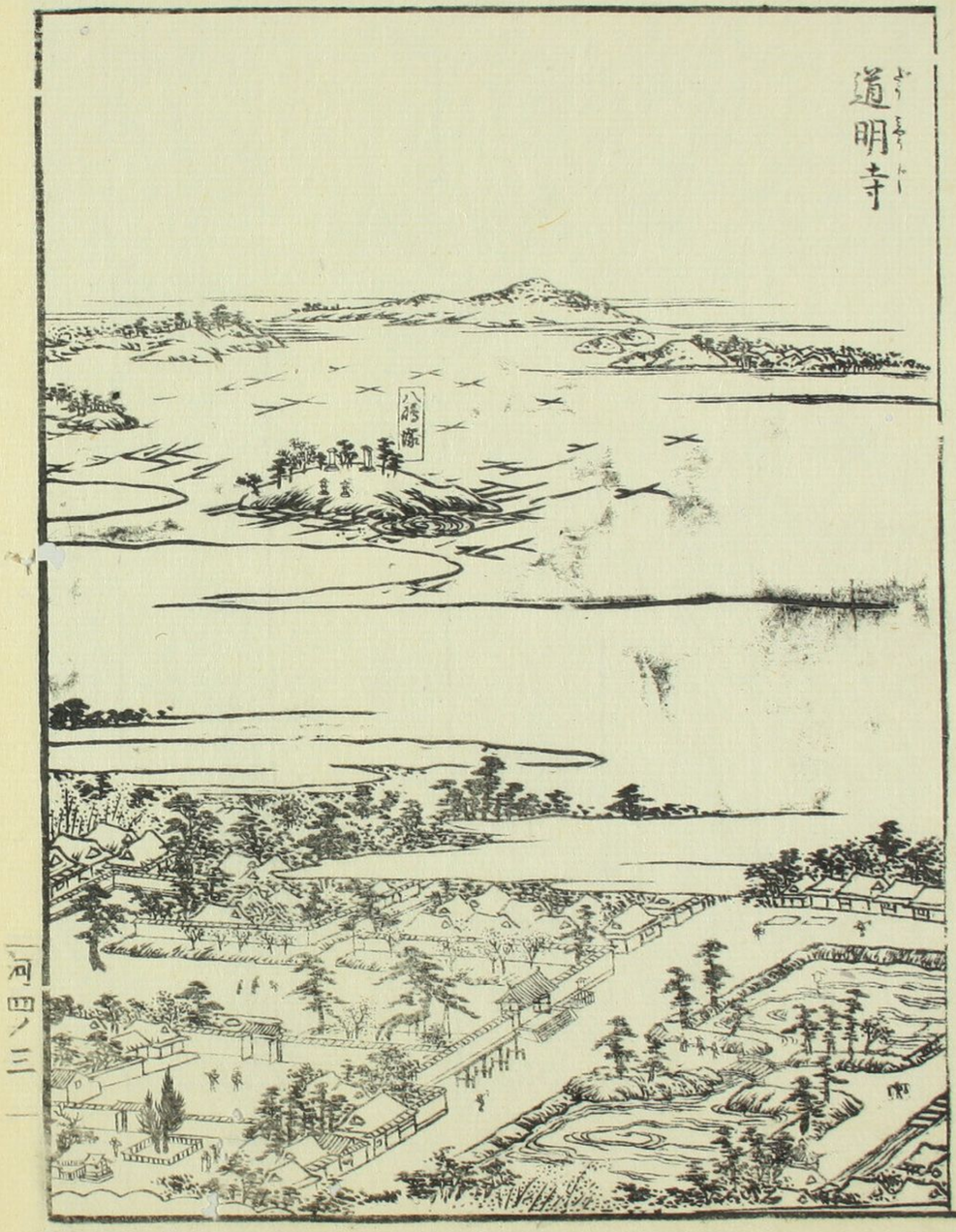
都留美神社

若江郡

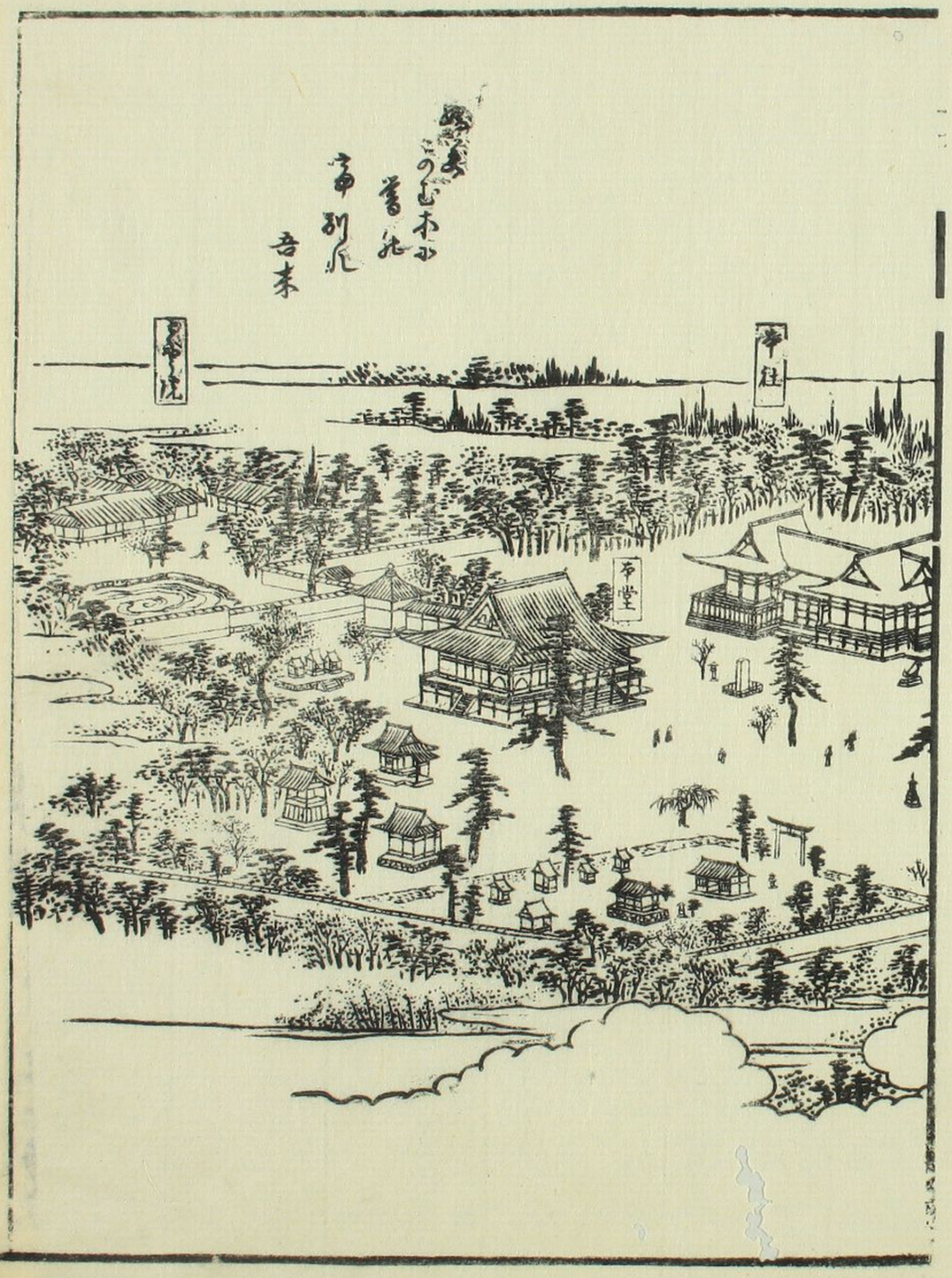
弓削行宮　弓削神社　弓削河原　都塚
都留美島神社　八尾木鶯　明川　高松塚

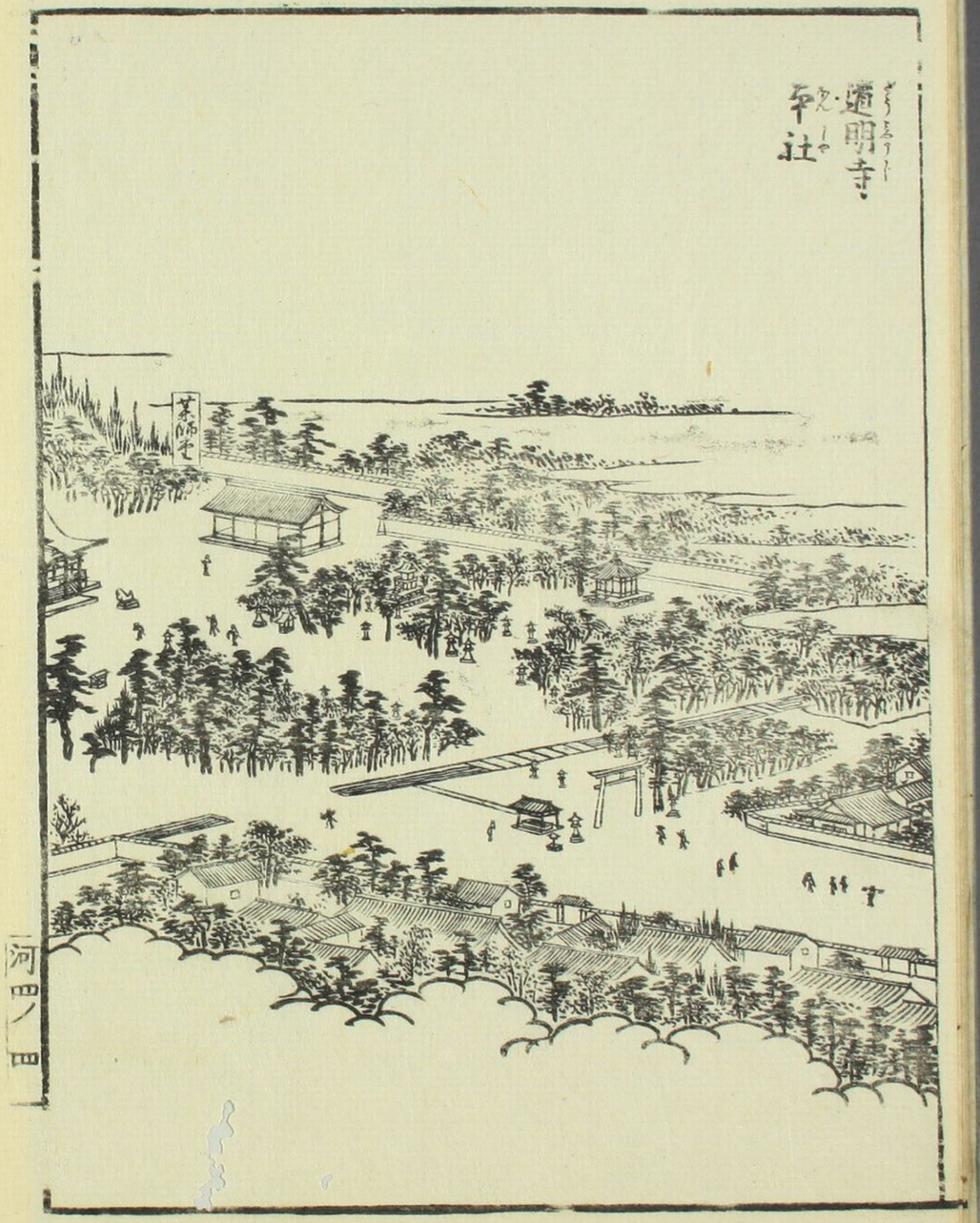


由岐宮
玄賓僧都址
泊魔堂
鐘堂
栗栖神社
若江城墟
彌刀神社
山口重信墓
鴨高田神社
弓削寺蹟
物部尾輿址
額
勝堂家戰死碑
長栖神社
鏡神社
雷神石
川俣神社
蓁額
石川丈山
碑銘
羅山子
長瀬川
常光寺
本堂
阿弥陀堂
大信寺
鐘樓
空風呂
玉串川
加津良神社
宇皮神社
猶巢里
長瀬堤
舍利堂
鎮守
成思庵
坂合神社
石田神社
木村重成墓
仲村神社


道明寺
八橋跡

勅撰古今
ふる雨ふ
通ひし八ぢの
梅の花
雪のうへ
ひたて
香のなん
菅原道真公
梅の古枝
八橋


吾来
本堂


遍明寺
本社
河目八目

志紀郡 東は安曇郡二郡の界を張り西は丹北淺川二郡の界を張り南は古市郡二郡の界を張り北は若江郡の界を張る

當宗神社 並に大月次新嘗 延喜式出 譽田村の北王社所

三代實録云 寛平五年四月七日始遣河内國志紀郡當宗神祭幣帛使國司一人專當其事並用國正税永為恒例

公事根源云 當宗祭上酉日是を河内國の伊勢神社郡司

午日使を遣はす杜辛當宗いと多佛門の外祖父を當宗氏なりにて仁和の四月十四日に祭をなす行

淺深秘抄云 寛平法皇御外祖母氏神在河内國

所謂當宗社也仍自仁和五年被祭之或説云

實御母儀中野親王女斑子女王云云

當宗氏新撰姓氏録云當宗忌寸出自後漢獻帝

四世孫山陽公之後也

恭天皇陵 澤田村にあり惠我長野北陵を陵の畔に小塚

十三あり内三つは道明寺にあり内七つは沢田

村にあり其外古墓村の雄朝津間稚子宿禰天皇

日本紀云 允恭瑞齒別天

皇反同母弟也治世四十二年新羅王調船八

十艘及種々樂人八十貢上聞天皇崩到筑紫

大哭泊于難波津皆着素服捧御調且張種種

樂器自難波至于京或哭泣或歌儛參會於殯

宮也四十二年冬十月葬天皇於河内長野原

陵

道明尼寺 土師野にあり土師道明寺村と云

真言律宗女僧寺職也祭法一名佛製他世に荒木と云

天滿宮 御自他現存の神社祭法一名佛製他世に荒木と云

天神也移れる後に覺尼公補他也

傳云菅丞相筑紫へ左遷の時道明寺に

在しも伯母沙弗の許へ立寄せしとて

あけぼのゝふ成ぬるを

寺號曰沙弗神號

鳥婆社別當憂計連鳥乃音之無羅牟里濃曉裳蛾菜

至今邑人忌畜雜

鳥井額 竪額正一位大政大威德天神と書

寶鏡寺宮理豊德嚴皇女御筆

幣殿額 竪額天滿大自在天神也

妙法院宮堯然法親王御筆

十一面觀世音 本堂に安置せる菅神沙弗自他長三尺許寺記云

元慶に年尚寺に於て菅丞相一夏安居

一刀三禮して彫刻せり上

号佛

試觀音 長弐尺許丞相右の大悲の像彫刻志給へ以茶沙弗試に

他に比類なし故に名付給へり

釋迦佛 本堂中央に安置せる丈六長三尺許

脇士文殊普賢

覺壽尼像 本堂に安置せる菅神沙弗俗母君姝

幼少より出家の志強く尼寺田名を土師寺と

号し武の沙弗に成り給ひ

圓形の比例にて本寺に於て

玄客の息女坊中に止住せり

本堂額　樹額　通明寺と書れ
寶鏡寺宮理豊比丘尼御筆
藥師堂　本堂の東側にあり　某所より豊臣國政所の御念持佛
當寺へ寄附
太子堂　聖徳太子二歳孔又十六歳の像と安置
鎮守　紅梅殿　老蘇宿　白山　若女龍王　雜財天
愛宕權現　多賀　稚荷　弁財天
妙善堂　本堂の西傍にあり
天穂日命社　本堂の西にあり　獻　象の社神　牛頭天王　婆利
賽　女社　俳せ　河内志云　天穂鳥命神祠天安
二年三月　授二從五位下一　今　秋二天王云云
當村の生土神也　例　象九月廿二日
三社神祠　本社より北町　傳神　寺記云　元禄八年　菅公　路四十の御
寺ふおのく一夏九旬の間ふ五部の大乘經を書寫しまつり
怒鉢　天童　武人　来りて　浄水　社汲ぐ　硯　泉
丞相　白山稲荷の神　神く
御經書寫　功德　守護
書写　經　菅公
怒鉢　て　三老　佐者　深　袋　袋に　晶の　念珠
持　現　れ　御　勢　石清水　表日の二神　基
講堂の西　方　訓　ふ　納　べ　と　命　
所を　紫　石の　玉　昇　蔵　埋伏
へ其　塚　木　樹　生　出　今に盛んべ一説

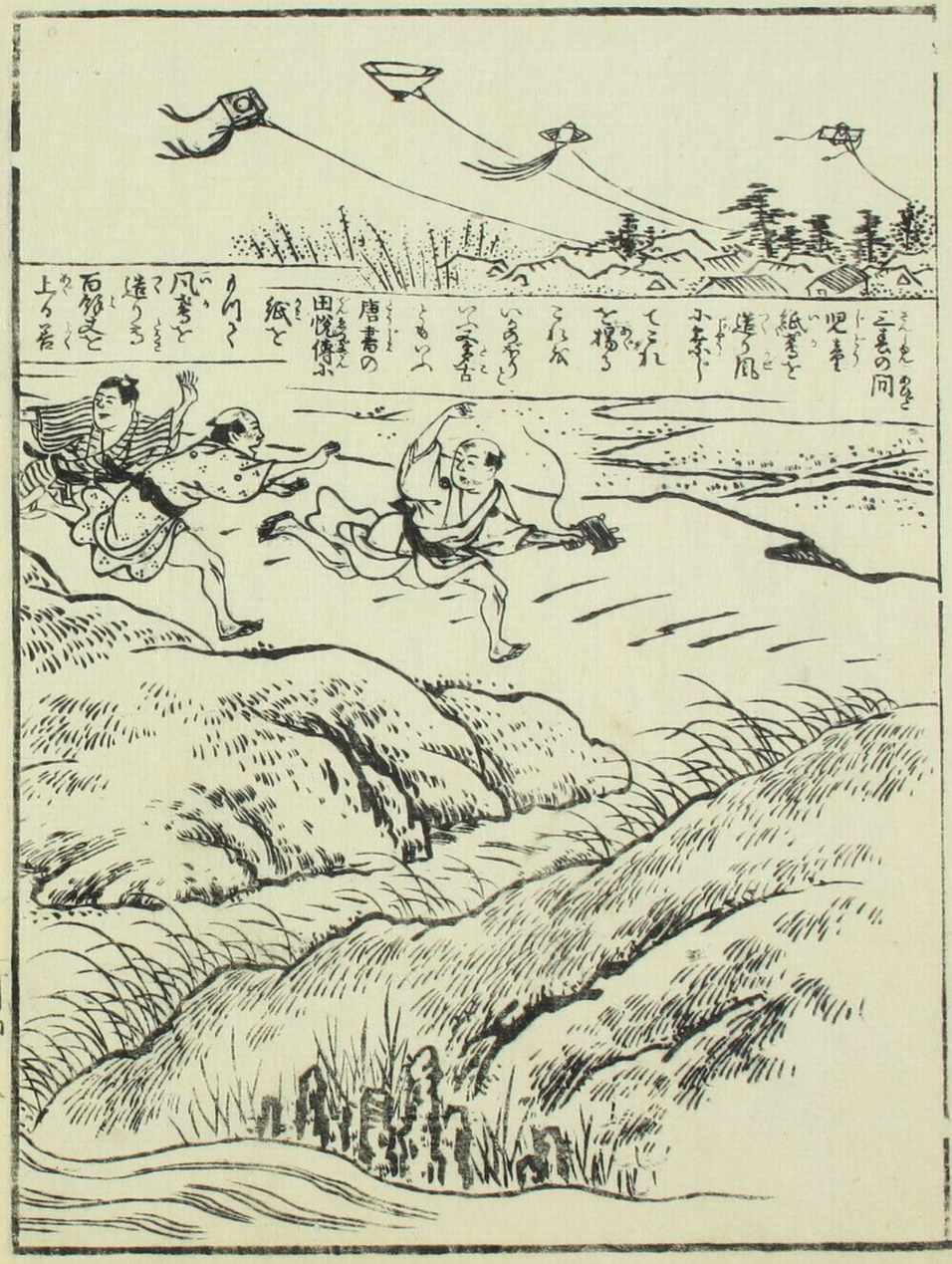
聖德太子五部大乘經書寫しまつる埋藏しまつる其是也
木樹靈樹　三社神の後ふ　根株遺　枝葉繁茂して盛んなり　諸人其實を得て念珠ふ繋ぐ
今坊中ようられを出る
二本杉　三社の前　老杉　勝
硯水　中門の脇ふ　經書を写し　井あり
土師八角祠　石國の祠　社の東南にあり　初ハ天満天神相殿
土師竈跡　中門の西　宮殿の前　裁手　昔　覆偶人を製つくり
龍池　當寺の東にあり　清泉四時湧出　祈雨時霊験
白石支祠　法内ふあり　大サ寺代の
土師八島家　西式町　石碑を建　元文五年六月
五條　黄門の命により　懷遠忠國建碑文畧
當社天満宮の祖　天穂日命に　其苗裔　聖仁天皇紀
七年ふ野見宿禰として　勇力の人あり　當麻蹴速と力競して
勝利を得　蹴速を腰折田の名に遺して相撲の始　同

天皇紀三拾弐年ゑ猶既を禁ぜられ其代ゆゑて埴土以ゆゑ
瓷偶人を製し後世の法則とす　又皇野見宿禰が才智ゆ
功を賞ずて野見氏改て土師氏を姓氏賜ふ（日本紀）　厳后　推古帝の
沛頼ゆゑ上宮太子佛閣を建営し給ふ時後裔土師八島連が家
と捨て拝金ゆゑこれを道明寺と名付ゆゑ此八角を我朝ゆ
今播氏親ひ初しくゆゑ其聲妙ゆゑて鬼神も感ずゆゑ鈸乃
上ゆ表く異形の者ありく俱ゆゑ八角い始りゆゑひこれを九ん
ゆゑく夜更人静く時の調ゆ以今く風ひ乃れ其曲ゆゑ

わゆ宿のつゆゆゆ序聲ゆゑ
其高聲の響しんを変相の者感ゆ感ゆゑゆゑ

あゆ九条南ゆゑ所夏史星豊ゆゑ人ゆゑ
ゆゑ神氏ゆゑ起しく三反渦ゆく雑波の方へ飛去ぬゆゑの別号を豊邑
ゆゑの人を即其部ゆを奏しゆゑゆ夏史星ゆゑ吳惑星ゆく南方ゆ

栖ぐ國土以守る星ゆゑ我ゆ吾ゆ人ゆゑ　傳　代寺ゆ菅亟相の沛嫉君覚
妻比丘尼在ゆ人しゆゑ亟相も時々ゆゑゆ来寓し給ふ人間泰四年九月
少ゆゑゆ詔ありくゆゑゆゑ人の沛身ゆ成ゆ人沛伯母沛妹ゆ留別ゆ
沛背頼ありて紙紙ゆ沛遷り有ゆく三ゆゑゆの後覚沛ゆゑしゆゑ
五十五年の後　村上帝天暦九年ゆ京師北野ゆ神威霊形所年
ゆゑく玲瓏ゆゑ宮殿を営ゆゑ菅賜大政大臣天満大自在天神宮ゆ
詔しゆく奉幣ある其頃道明寺ゆも方三所の杜乃中ゆ社檀以
建立ゆゑ梅を植ゆく天満宮ゆ崇ゆゑ人ゆゑ
ゆゑて歳重ゆゑゆ土師村の外ゆ猶葉菱江の二村も寺寿成
しゆゑ元亀の頃古市高屋城兵乱の時没収せられ寺ゆ羅
一時ゆ焼ゆゑる天正年中宮より命ありて再興ありゆゑ
神徳を新ゆしく陰時以嬢以猶人間断ゆ
毎歳二月廿八日を舎式として遠近諸人集ゆ　菱江浜乃祀ゆゑ
乃ゆゑゆの沛付河内国人三寄ゆゑ中ゆ者のゆゑゆゑ


三月の間
児童
紙鳶を
造り風
ふきて
てこれ
を揚る
これを
いかのぼり
といふ
唐書の
田悅傳ふ
紙を
もつて
うかく
風鳶を
造りて
百多を
上る者

射る者をして仏を射さしむ
韓信が作るい高祖陣鞆を征
をる時未央宮の遠近を量る
潛確類書云凧の風に下よ
しく上ふ
升る
燈籠
これを
よりて
看る

菅公廟碑　神敢ふ建京師地海先生撰

内大臣正二位源朝臣前豐卿銘拜撰

河曲北山彰恭建　丹北合離謹書并篆額

贈太政大臣正一位菅原公卒葉名德登庸一時摺笏三台儀型百司其忠誠溫克微猷偉範所不必論也輔理贊化之暇能以文師表于百世而蒼蠅之玷西帆不返於是天怒人怨象緯錯行雷霆激變乃輙發金縢之悔馳王節之使追贈褒恤之典建廟致祭之議靡弗崇厚隆重焉而後公在天之靈終和且平報以介福國家之金湯下為黎庶之甘霖日月上為公之孫子後裔及在朝以維新矣然則不特公之追慕景仰而褒區男女無在野儒術文藝之士有求必祭禱焉蓋公之貴無賤災殃苦凡人之欽戴公也亦復出精誠能感動天地而神感靈應影響于古今一世至誠至信以故于公之祠廟京之北野筑之之所傳不可誣也宰府亡論耳其他郡邑無有不祠其或在時輪蹄所歷磬欬所存必祠祭之以表甘棠屋烏之敬愛而河內州土師邑道明尼寺中所

朝州也公之遠祖土師八島搶地造寺曰名土師氏世稱檀越土師氏師寺後改今名於是土師氏後姓菅原有尼覺壽住寺於清寂留或旬餘是以公歌其詳載在寺記其西遷倉皇猶且請于朝而來告別留宿依依繾綣弗忍去也雖鳴歌可微焉夫惟公之昭明精爽洋洋乎寰區來享日月之明方竅圓隙靡邪不以私測之豈莫差次平今亦猶各處所祠祭亦將奚疑雖然寺則遠祖所造以親則透射其鼻祖所受以地則公之姨住持以境則留或旬餘是以公之遺愛其清寂詩之歌之笏其他手澤所存盤藏至今不啻甘棠屋烏也由是言之景仰公之威靈於千載之下者捨此安適抑道明尼寺營造也距今千有二百年女僧相承多出于簪纓華族而主法清肅戒律堅固人無間言此其雖曰垂統得宜保守有人要之公在天之靈保護之於冥冥中者非耶本州一屋村北山彰好學無二夢寐斯文仰慕公之學德且以地境隣近故拜趨最謹焉乃欲請言於綬鐫石以傳不朽而會內大臣源公聞其舉親製銘賜之中焉彰字元章本姓橘氏楠公之亂興綬誼在久要顧綬未學謙劣曷足記其明德亦唯闕寺記所載錯綜成編以應其求云銘曰

惟岳降靈　大闡儒風　懿行可摸　惟誠惟忠
五教戸到　文化日隆　台曜愛和　萬物斯從
夷險一塗　天鑒豈空　封祠千載　比德青松
神威如在　拜趨仰宗

安永四年歳次乙未十二月六日

○道明寺神寶

八葉御鏡　勅封此御鏡ハ天満宮御神體ナリ往昔　花園院御宇
延慶三年和州室生山ニ傳法灌頂アリシ時　天満宮ノ白御ヲ
西林寺の鍛冶上人導師トシテ造ル　時者丈石帝
道明寺ハ八葉鏡ハ我ガ師ノ作ナリ　天満宮ノ白御ヲ
向ハベシ少シ絶シ　因是鍛冶奏達シ　勅封ヲ下シ
迄年享保十二年　霊元院帝　中御門院帝　叡覧の時御加封ア
天満宮楊枝神影　菅神八葉後ヲ向ハ　ヲ写シ
御　硯　菅神四十年の御時佛師仁和二年又一夏紙書寺ニ於テ
阿字鏡　寶剣　二品ハ菅神ノ時ハ神鏡ヲ金泥ヲ以テ阿字ノ紙書
神童硯ト神勅ヲ受ケ　安居院八幡宮七ヶ日参籠シ七月十四日ノ夜
般若心経　阿弥陀経　二経俱ニ紺紙銀泥ニ書写シ
石帯　一角笏　櫛笥　中ニ御櫛　髻式部ノ

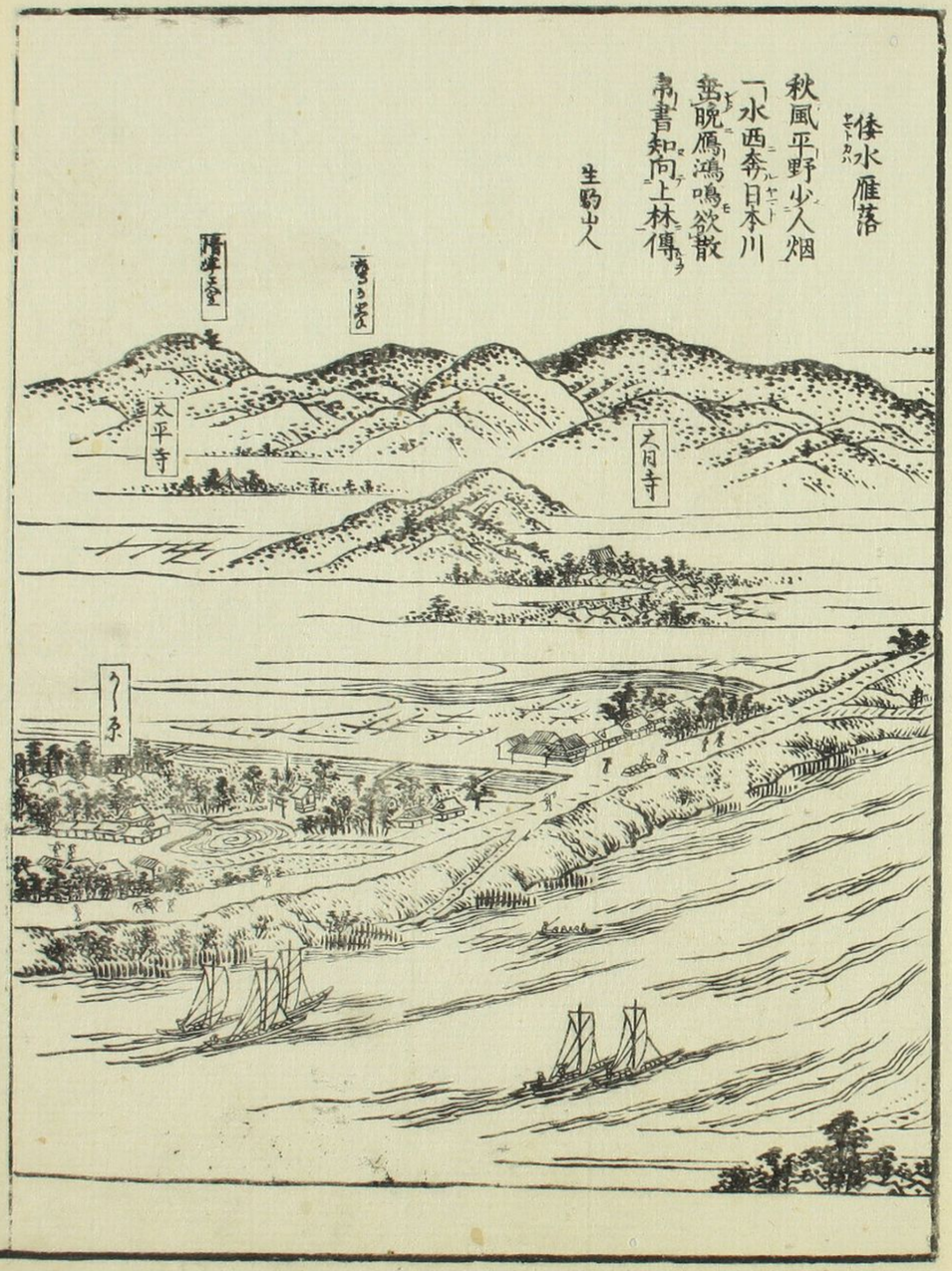
五股鈴　小刀劍　柄ハ烏犀鞘
俱ニ菅公御所持
此六品ハ菅公薨御の後御遺命ヲ以テ
ヲ賜ヒ　品器なり
瑠璃壺　絞州宇佐のわたり
龍女硯　器なり
佛舎利　五粒五色菅公年久しく
兄妻尼へ益ヲ
袋外奇品多し　器
名産猫　道明尼寺坊中ニ
世ニ猫を道明寺ニ多ク
于飼を道ハ
ち　名産なり　麻乃ちる
班作

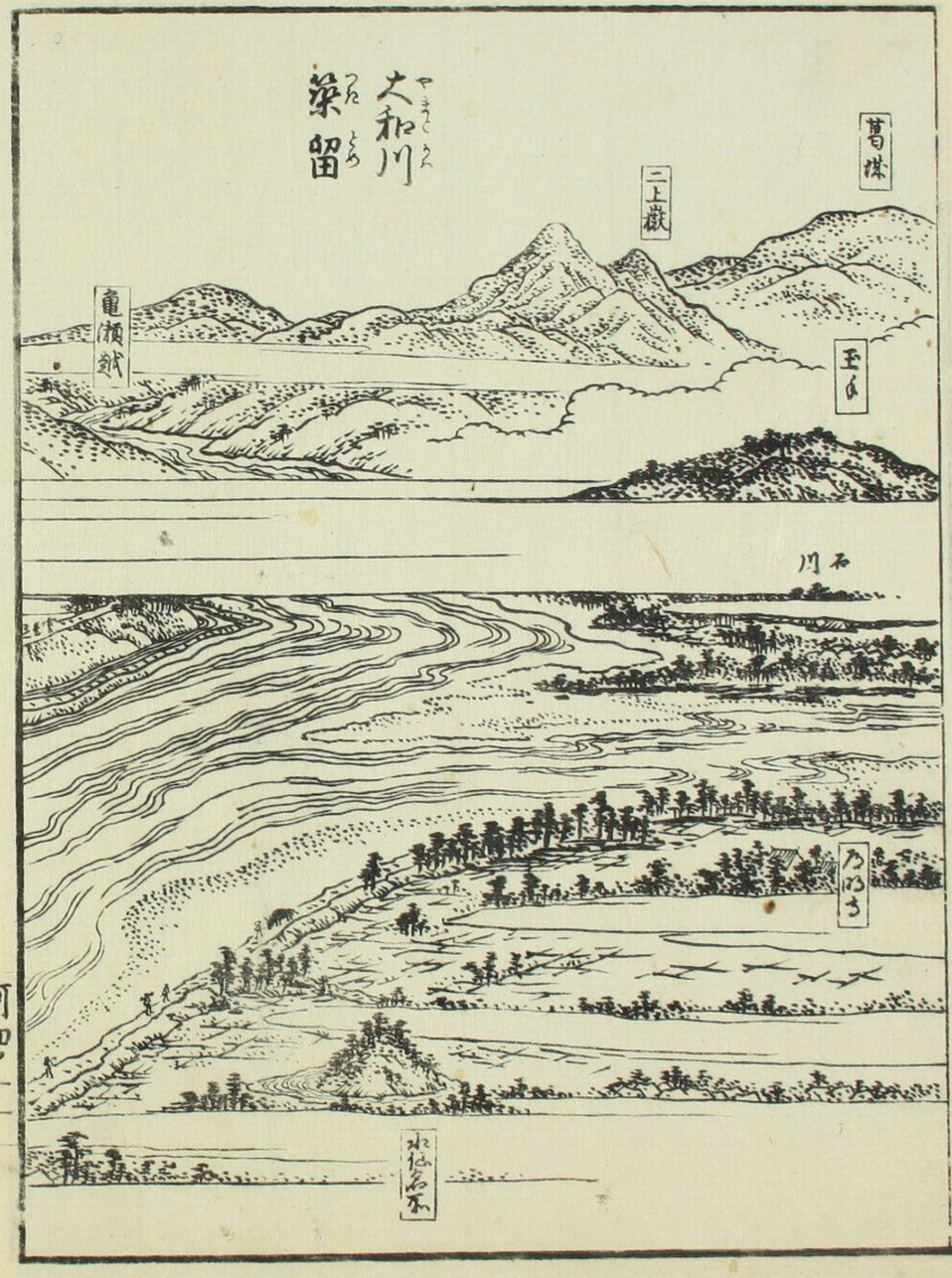
庁足羽川　岩瀬郡東界ニ又河内の大橋萬葉ニ
石川の旧名ナリ

見ニ河内大橋獨去娘子歌一首并ニ短歌
級照庁足羽河之左丹塗大橋之上従紅赤裳
数十引云云反歌大橋之頭爾家有者
心悲久獨去兒爾堅戸部申毫

國府　村の名ナリ
無題詩
府ニ下ノ即ニ事　屬邑一村
河州底事屬相歎ニ為是詩ニ朋會遇難
酒酌十分鱒下酔歌傳五稔境ニ中寛
佗ニ郷秋暮行衣薄旅館曉ニ來落ニ月寒

大江佐國


倭水雁落
秋風平野少人烟
一水西奔日本川
蕎晩鴈鴻鳴欲散
帝書知向上林傳
生駒山人
太平寺
大日寺


大和川
梁留
菖蒲
二上嶽
亀瀬峡
玉手
石川

志貴縣主神社 國府村ふあり延喜式出今春日神也 祢ル

總社 總社村ふあり傳云 古昔國府必建社有事于國内官社則國司率僚属先修曲禮於此其儀猶京師祇宮也 當村國府村生土神ト云ル例条九月九日當村ふ戊寅千軒ヤ

いと古跡ハ墓水蛇目清ふあり 開春寺ト云ふ古刹ヲ獨長和ヲ中ヨリ

市邊皇子墓 履中天皇第一皇子ナリ 村ふ在リ墓畔ふ荒冢三ツ林村の籠内ふあり 市邊皇子ヲ母ヲ皇妃黒媛

孝女衣縫氏墓 國府村衣縫千軒町ふあり土人ハ塚ヲ称ヲ孝ヲ称ヲ又の名乙子冢 傳云 衣縫氏ヲ衣縫造の女志紀郡ヲ人形ヲ

孝十二ふ 父ヲ失ヒ泣血成長の人ふ過ル服闋ル母孝ヲ

ヲ議ヲ女 これ孤風ル云ヒ父の墓ふ到ツて哀慕ル

日母ヲ孝ヲ 孤母ヲ心ヲ免の母情ヲ孝ヲ と謂ふ孝ヲ

保ラん母孝ヲ 孝ヲ保ふ其後紡績孤ヒとめル衣食ふ供し

母ふ孝ヲ 孝ヲ至孝ヲ 頗ル佛教ふ聞て薦修ヲ

寒ヒ 涅寒の時ふ至ツても雑材ヲ買ル 樵孤惠我川ヲ

父母の墓傳ふ庐ヲ建ル哀 父母の墓傳ふ庐ヲ建ル哀 ヲ忘ル十五年 ふ孝ヲ 承和八年

粉して位三級孤賜ふ身ヲ終ふまで戸内ヲ 孤ヲ

門閭ふ旌表ヒ

黒田神社 北條村ふ在リ延喜式ふ出今天神と称ヒ

地の生土神ヘ

志疑神社 上井村ふあり延喜式ふ出今天王と称ヒ

地の生土神ヘ

伴林氏神社 林村ふあり 地の中居神

名産水仙花 舟橋村ふ多シ 霜雪をうけて開く

八九月の比ふ開花孤 名花多くあり

名産小山團扇 小山村ふ製し 張洗ふ

二好城址 小山 法堂二村の間ふあり上ふ神祠在リ元亀年中三好康重

新大和川 石川大和川の二流ふ合流ル 丹北郡の諸村を歴て直ふ

拾州場津の川大和 拾州場津の川大和 高サ弐十尺 両岸 拾州場津 高サ弐十尺 両岸 拾州場津

水害の患孤 水の傷郡

藥留 古流の跡ふ堀を繁くくれを藥留ヒ人数の樋あり

ふに細流二川あり田畑の用水 又荷物運送のふ

川 古流 古流 又新川の

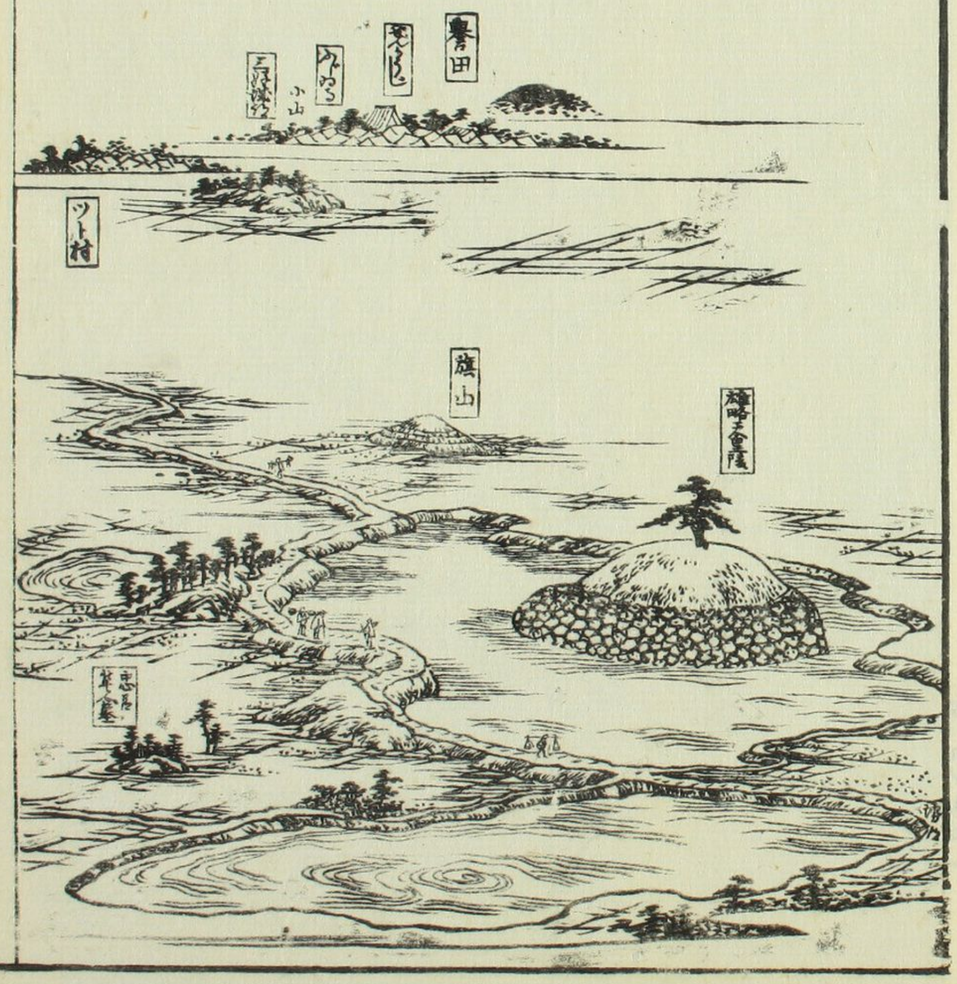
換地も 田畑ヒ

柏原清水 柏原村ふ在リ都會の地 商人多シ 清水ヲ当村

三田氏の家ふあり 井味四時涸減ス

雄略天皇陵

忠臣隼人墓



同云延宝のころ老僧の鄭堂老人金剛山へ徹せられし時此拘原村
浄久が亭ふ立寄茶ふ給ひ結しかりてあるし夏日を
もてなしふ此地名所旧跡の郡史を問ひる主志紀郡史書ひられし　夏室

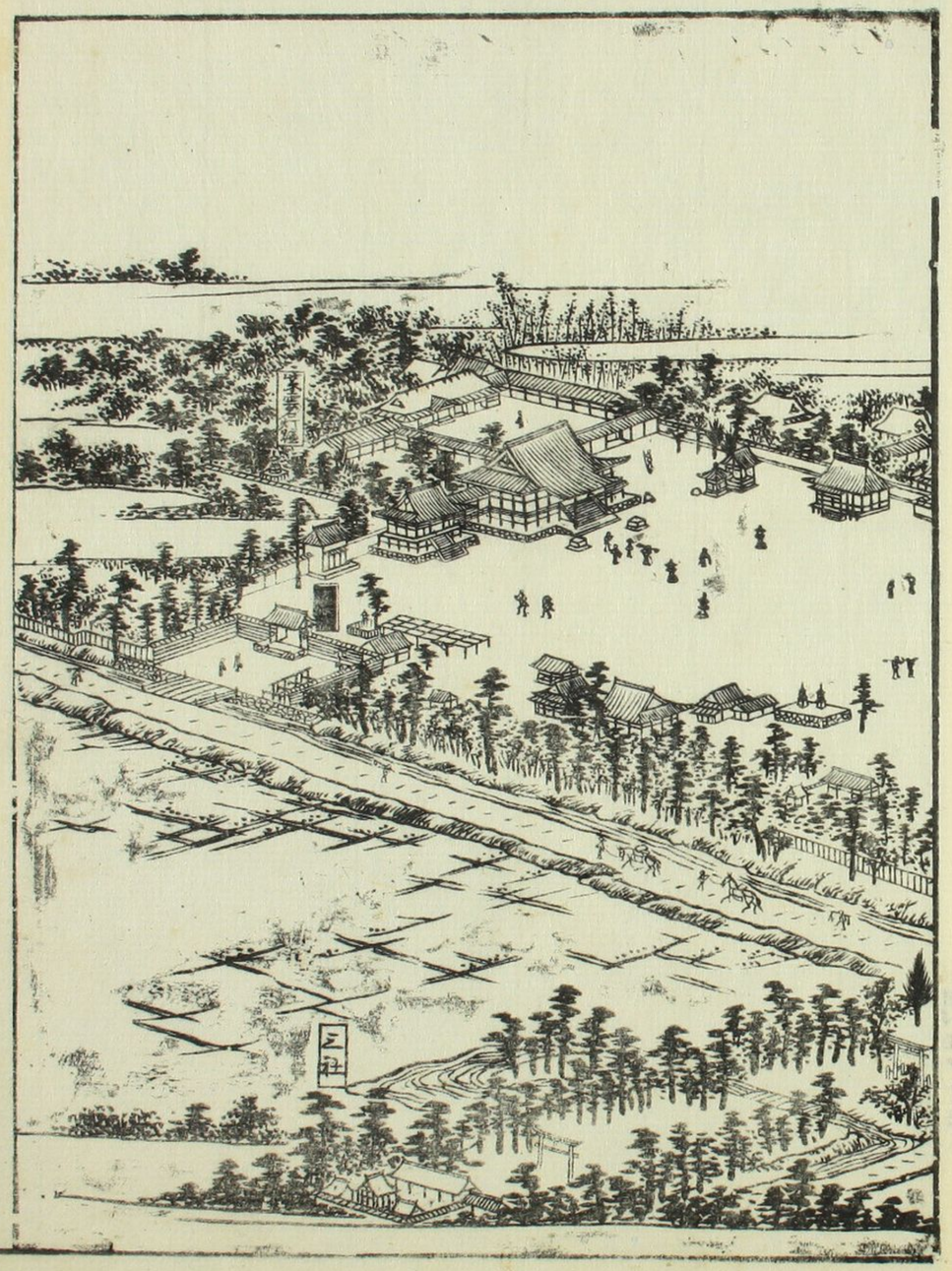
夏川の流れ郡名ことわり
又鄭堂老人の夢ふ入遊を一編あり其書云
[illegible]
ちりやちれ麦いあしくとくとくとかりの面

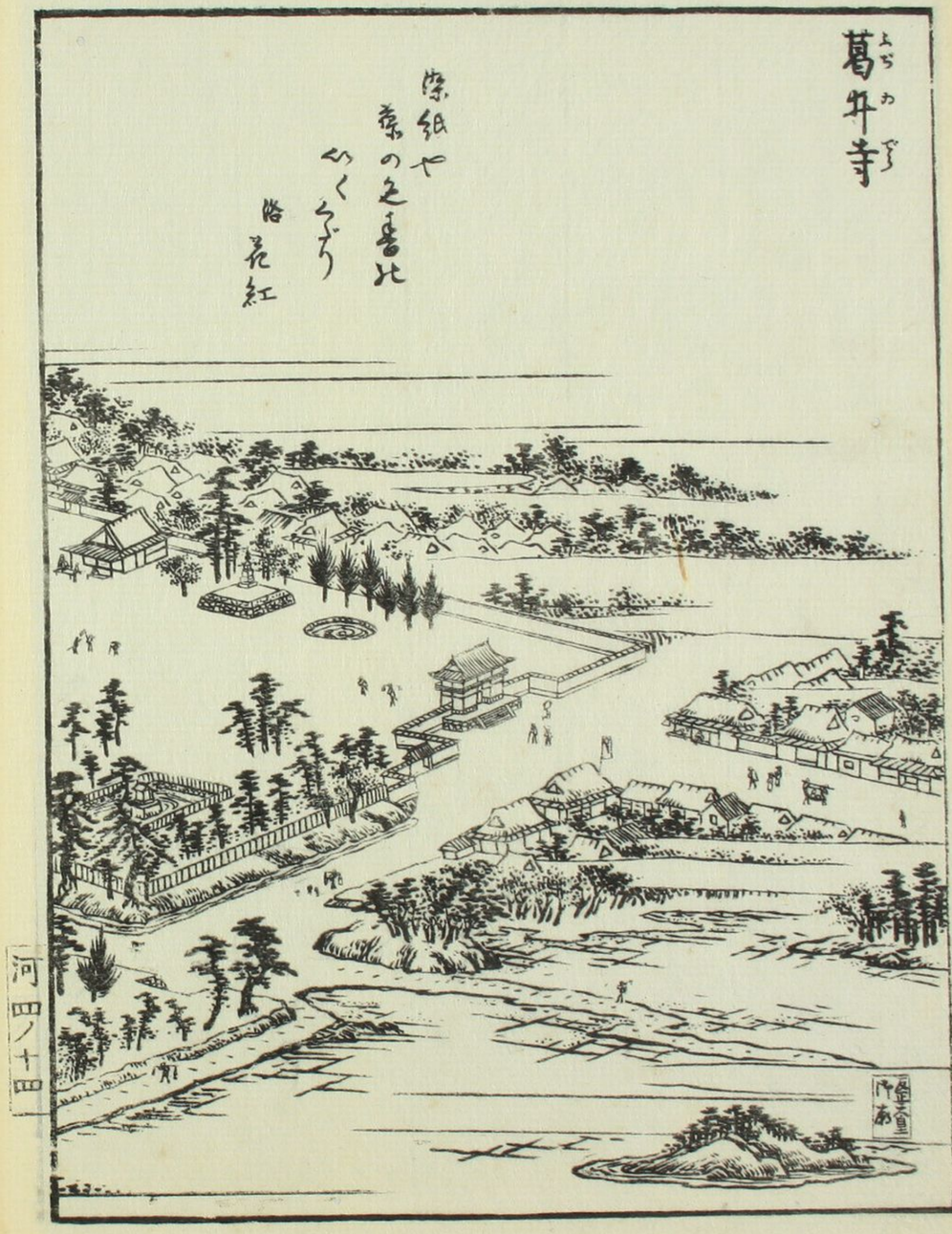
玄旨法印

旨人乃至庶のたりや桃李花
拘原村浄久の門ふ宿ひ作りしてよ
長頸丸
長老が作を発茶ひ記してよ
長老を有しいとも悦ばれい先名所旧
遠作を書付給るあるふことなりとも

一囊軒貞室

此三田氏浄久ふ延宝七年河内名所記て書ふ名ひられ村
李岑茶の序あり又句集ひ
吟月のや茶毒ふ嘲も本捷ふ　浄久
句集を見て
樂書のひし紙茶人ひ
名産木本乾瓢　本本村ふ[illegible]を製ひ又沼村の南ふ名永享寛正日線ふ
熟もれを色赤く肉軟ふ通明寺長照院相国ふ公御廟ふ進ひ上品ふ其状瓢大ふ
又棉布い木本村ふ出る幅広ふ[illegible]大田燕乃ふ此ふ[illegible]の名者く
家原慶寺　老原村ふ天平勝寶八年二月　帝ふ[illegible]ふ[illegible]
續日本紀延喜主抗式云文殊會料二十束ふ賜人


三社


葛井寺
除紙や
京の足音比
べくらべ
洛花紅
河内ノ十四

新選
小山園
立雛組云
大明以花
摺扇ふし
ちく園扇
を用ゆ
和訓義解云
うちわ
てんみ
ちぐの
喩うり
浅草
御園扇
北

扇
むかり
出しく
夏ふ藤の
うちわ
文暢

丹南郡 東ハ石川古市二郡の界ニ限リ西ハ八上及泉州の界を限リ南ハ御陵の界ニ限リ北ハ丹北の界ニ限る

紫雲山葛井寺三寶院 葛井寺村ニあり真言宗 一名岡瑞寺

本尊千手觀音 脇士 文會 脇士 勢至 地藏 正觀音 薬師 長谷寺 本尊の御長四尺八寸一千四十二臂 脇士 五尺 西國巡禮三十三所の中第五番の札所なり

葛井野中に表あり今藤表と云地高寺の旧跡なり 伽藍の字なし

大威德影向石 本堂の西にあり

大威德影向石 本堂の西にあり

不動堂 本堂の西にあり

菩薩堂 本堂のお西側にあり 鐘樓 本堂の東側にあり

鎮守 牛頭天皇 荒神祠 樓門 二天 仏安 持國 増長の

紫雲石燈籠 聖武帝御寄附 方丈の庭中にあり 石の色紫にして石目細密

業平屋舗 方丈成就の庭 奥院の旧跡なり

其記に云

當山の寺記に三條西殿内大臣實隆公の御筆 道遥院

裏寺に 聖武帝叡願ありて建立の伽藍行基菩薩開眼供養の梵場なり 加之 平城帝の御願阿保親王再造の精舍

大威德天王影向不斷の靈跡金剛金峰両山の肝心に葛木嶽起あり

葛井寺に葛木の西門に云 本尊は聳文會聳首勲の聖作

千手千眼觀世音菩薩御衣本は和別長谷寺大悲の同本妙相

端嚴にして感應無雙の尊像三十三所巡禮の地諸佛説法輪

利生の御形なり 茲に明應二癸丑夏一國の乱あり行く兵火に羅く

樓門中門三重大塔鎮守 業平朝臣造立の奥院多燒亡し

畢ぬ 慈心を運ぶ 本堂寶塔巍然として てこれあり仍て

衆僧の願を諸檀那力に勤せ 舊基に復し又永正七庚午八月

八日曉大地震一寺滅亡本尊無恙 未聞帝代の神変なり

一刹伽藍の退轉に衆生損化の方便に誠に歎の中に歎 況而願

人々宜伽藍再營の志に勵し 一紙半錢の御財を恥て願解

形に慈心を運ぶ 丈以千手觀音に四八端嚴に慈容

三千正覺の導師なり 一見一禮者永離三惡趣 遠に二世の願を

滅しむべき者多し仍寺記如件

永正七年十月日

葛井寺什寶

後醍醐天皇綸旨　二通　同和歌三首　松虫之餘　真如法親王
楠正成菊水旗　一流　楠正儀壁書　一通
高越後守奉書　佐久間壁書　一通
地藏尊　正觀音　阿弥陀佛之像　惠心作
不動尊　久　像　佛舎利　聖武帝門寄
十六善神　琢磨筆　智證大師作
寶頭盧尊者　行基作　大般若經全部
寺中伽藍古圖　土佐將監筆

葛井寺戰場

正平二年八月十六日楠正行精兵三百騎とゝもに北軍を
大將細川顯氏が三千騎を殺し勝利を得し所なり
太平記に楠帶刀正行を父正成が先年湊川へ下りし時思ひ招あれ今度の
合戰不我を必討死せべし汝い河内へ帰り君のめ何ふも成せ給んぞ所
市有様を見果なれと申含めしゝ其庭訓忘れ給ず十餘年我身
の妥孤侍く討死せし郎從共の孫を扶持して何ふて父の敵
滅し君の御懷を休めまんや肺肝を若しめてぞ思ひる光陰ふ

闘守らふし　義稙く正行既ふ廿五才今年い討死又父が十三年の遠忌ふ
當りし四ど供佛施僧の心ぞ吾心のまゝして今を命惜しも思ひざりなんで
其勢五百餘騎孤軍して時を住吉天王寺を出く討出る中路の在家おく
焼拂く京勢や来ると待ぬけるう將軍これを聞給て楠が勢ふん
分際孤ろふにさて我とあゝ先是ふ亀焼を侵し奪れく治中驚て馳く
軍天下の物笑武將の恥辱く急ぎ馳向く退治せよやて細川陸奥守顯氏
孤大將ろして宇都宮三河入道佐々木六角判官長左衛門尉田治部左衛門
赤松信濃守範資今身筑前守貞範貞村田京兵衛尉良遠坂西坂東菅家の
一族共ふ加合三千餘騎河内國へ発下ふ氏勢八月十四日平野ふ葛井寺
ふ着ろ陣を張ふ楠が舘へ七里孤隔ろれを能今急々ふ寄所
しも的日ふ的後日ふの用ふ我ふ寄んぞらんと系勢由断して或ふ物具孤
解く休息し或ふ馬鞍を下して休る所ふ譽田八幡宮の後形る山陰ふ菊
水の旗一流ふの見へく初ふ甲の兵七百餘騎用々ふ馬孤歩ませてうち寄

こうスハヤ敵の寄こうるハ馬ヲ鞭とり物具せよと云しめ元ちめく所へ心ガ
真先ヲ進く喫て意入ル大將細川陸奥ヲ獲とて肩ヲ並こうれども未上帯
とも〻得ぞ左刀ハ茅ぐさ落もかく見くるる同村田の一族六騎小具足計ニ
ひく誰ガ馬ともヲ取ヒタくせ折騎て如雲霞群く拍こうる敵の中へ寄入く
大ハ敵ハ〻ハ〻ハ〻こうるこうれども續く味方ハ大勢の中ヲ彼取敵村田の
一族六騎ヲ一所ヲて討れヲわ其間ヲ大將も物具堅め馬ヲ打乗くお駆〻人
兵百餘騎皆支く強こうり故ヲ小勢ヲ味方ヲ大勢ヲ縦進く寄合〻まても
敵く引退く兵ごヲ無りせば亦勢敵く屈伸ヒ侍ヲ諸國の駿武者ヲ
支て戦ヘど後ヲ捨敵打て引ある搦勢勝ヲ乗て退寄〻ハ大將天まる渡ヒ
ヲく花見くられど六角判官今弟六郎左衛門返し合く討れヲわり赤松
範資今弟範貞今ハ名ヲ換く討死せんや取て返し七八度ヲ踏止く戦
侍ヲ奈良淺栗生田も討れヲわり此等ヲ支られく敵こうるヲ追ごうりれたし
大將も士卒も花命ハ助て皆京へぞ帰上りヲ侍

長野神社 鎌延喜式出雲郡式所の本居神こうる
釋慶俊 傳云葛井寺のハ
元亨釋書云 慶俊い姓ヲ蘇我氏ヲく河内國の人ヲ
学び大安寺法華寺等ヲ居住せ侍嘗く京師愛宕山と辟き
少人彼地ヲ移く第一世の祖こうるこうれば 光仁帝御宇ノ天應元年ヲ
あこうて僧都ヲ称れり其性慈悲の愍仰く貧者病者ヲ絶ん
半ハ好めり 神社考曰慶俊遷立西寺者也
滿願寺 延中村ヲあり野中山ヲ号ハ真言宗
聖德太子御建營の地ヲ
本尊藥師佛 産像ヲ天武ヲ又十一面観音立像ヲ尺八寸 漢字牛頭天王
仲哀天皇陵 葛井寺の南岡村の菅原ヲあり 祇王廟陵記ヲ 神紀那
上、原にあこうとれん 指こうるヲこうれる高向王の墓ハ〻く淺あてハ
かゝ系卷ヲ見人こうり
日本紀曰 足仲彦天皇 京都日本武尊第二子也母
皇后曰 兩道入姫命 同御宇二年春正月氣長
足姫皇后 為皇后九年春二月天皇忽有痛身
明 印崩時年五十二 祥功紀二年十一月葬
天皇於河内國長野陵

酒屋井

聖上
野中寺
弘法井
酒屋井
河内八十九

仁賢天皇陵　聖々上ふあり埴生陵と称陵を移を河内志ふ黒山村御陵
ありとる謬あり
日本紀曰　億計天皇仁賢諱大脚字島郎弘計天皇
濫ー慈　同母兄也幼聰穎才敏多識然而仁ー惠謙ー恕
同御宇十一年秋八月天皇崩ニ正寢冬十一
月葬ニ埴生坂本陵ニ
覺峯師云ふ陵河内志ふ丹南郡黒山村ふ在也記せり黒山を埴生坂と
三十町許坤の方ふあり坂本と云ひ伝れ又大塚と云ふ所あり
帝北陵ふ云ふ東西ふ長く築く載陵の南ふ東西ふ長く築く載陵の南ふ
坂本と云ふ埴生坂と云ふ乾の方三十町許ふ
丹南郡野上村の西ふ
きあり其陵度を
此中村の營内ふ
文ふ
ヤなれ
青龍山野中寺德蓮院　聖々上村ふ
真言律宗
中尊藥師佛　聖德太子沛仏長弐尺七寸又観世音菩薩大師の仏分丈ふ安置
観音堂　中尊の左ふ聖德太子沛仏長四尺五寸
惟喬親王の沛帰依佛
地藏堂　中尊地蔵菩薩沛仏長三尺
長三尺
経藏　惠心仏の阿弥陀佛長三尺
又弥勒佛金像と安置
太子閣伽井　分丈ふ
河四ノ二十

楊枝井　寺の流ふあり沙羅大士　鎮守　八幡宮を
楊枝ふ掘ふ井ふ
瑪瑙三石　一ツ高山分丈の高ふ一ツ中堂のお弁天の
一ツ野村の池中ふあり
伽藍古礎　法隆寺ふ
夫當寺ふ厩戸皇子の開基ふ
往昔ふ七堂伽藍の霊場ふ中頃の兵火ふ焼滅ー荒廢ーて久ーを
礎のみ残り
中興ーて戒律の道場ふ
律師ふ秦氏ふ
再興ーて
埴土坂　野々上の
ふ云ふ
ふ云ふ
古事記曰
波流布　伊弊牟良都麻賀伊勢能阿多利肥能毛
由　邪加　和賀美禮婆迦藝湍
野中神祠　野々上村ふあり今亀池辨財天を祭る
十七年八月　授従五位下云云

羽曳山 又羽曳野云 山城郡郷郡山城国なり 石川古市の
郡 みな郡 郡 高郡の中 平尾山 丹比の丘
埴生阪 みな
此山中 ふあり

幸國神社 延喜式 志紀郡 載 国村 今 幸日と称 社のわに 彩雲の
池 なり 三代実録云 貞観九年二月預官社

大津神社三座 欽叡延喜式出丹下の宮村 ふあり
今大宮と称 此所の生土神

櫟本神社 欽叡延喜式出 真福寺村 ふあり 今八幡と称 此地の生土神
社頭の傍を櫟本 又真福寺 ふあり

丹比野 郡 丹南 丹北の
郡 郡をいう

古事紀曰 多遲比怒迩泥 牟璽斯理勢婆 多都基母
基母 知豆許麻志母 能。泥 牟登斯理勢婆

丹比神社 欽叡延喜式出丹治 牟村の西 ふあり 今 松天神 祭 祭
此所の生土神 文徳実録曰 兼和十四年
十二月 授従五位下 嘉祥三年十月 授従五位上 又
三代実録云 貞観元年七月 遣使 於諸社 奉神宝幣帛
丹墀真人縄麻呂
為丹墀杜使

菅生神社 延喜式曰 大月次新嘗 三代実録云 貞観元年九月
授従五位上 菅生村 ふあり 祭 神天穂日命 なり
今天満天神と称 土人 菅生の地 ふ 例祭
六月十五日 秋祭八月十一日 火焼十一月十五日 近郷八ケ村
本居神宮寺 弘金剛院
号 ふ 言葉伝 ふを守 ふ

菅生天神

此境内 清水池の中 ふ
菅神誕生の碑 なり
しらず 書 事 なり
菅神誕生の所 ふ
来師 高辻西洞院
菅天満社の北 なり
拾芥抄 ふ 見 なり

荒陵 黒山村の北にあり孝元墓山也と云 周百五十間 池を掘りて石を畳み 河内志に仁賢天皇の陵也と書り 謂なり
一説に云 天武天皇陵 大和国高市郡檜隈にありと云 改葬しまゐらせり
俱に分明なれば後勘 [illegible]

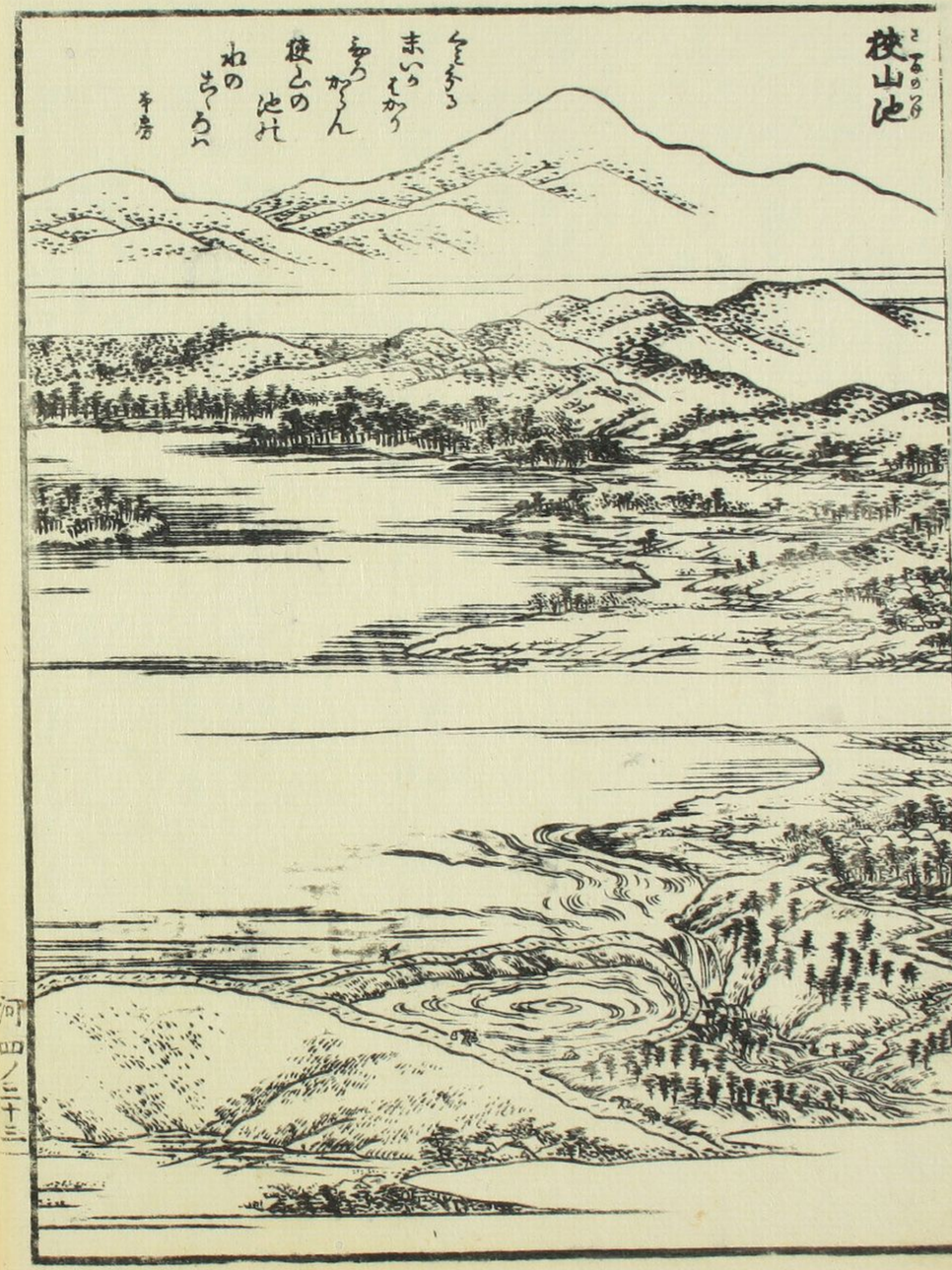
河内鴨古跡 大保村にあり 俗訓往来に見へ
鴨の丸宮 祠 [illegible] 村中にあり 村中 奥氏の祖ふく氏
寺 [illegible] 或云 鴨神丸神と称し 又鴨社と号して 神代より石 [illegible]
城 [illegible] 鴨釜を [illegible] 天津児屋根命 [illegible] 明 [illegible]
称 [illegible] 神代 [illegible] 民 [illegible] 屋 [illegible] 茅萱を [illegible]
[illegible] 五穀を入又其 [illegible] 茅萱を [illegible]
釜を炊く 鴨釜 [illegible] 猪田 [illegible] 荒神と書い [illegible] 火を焼く
[illegible] 鴨も土鴨なり [illegible] 後世の事なり [illegible] 神 [illegible] 近江 [illegible] 麻呂の

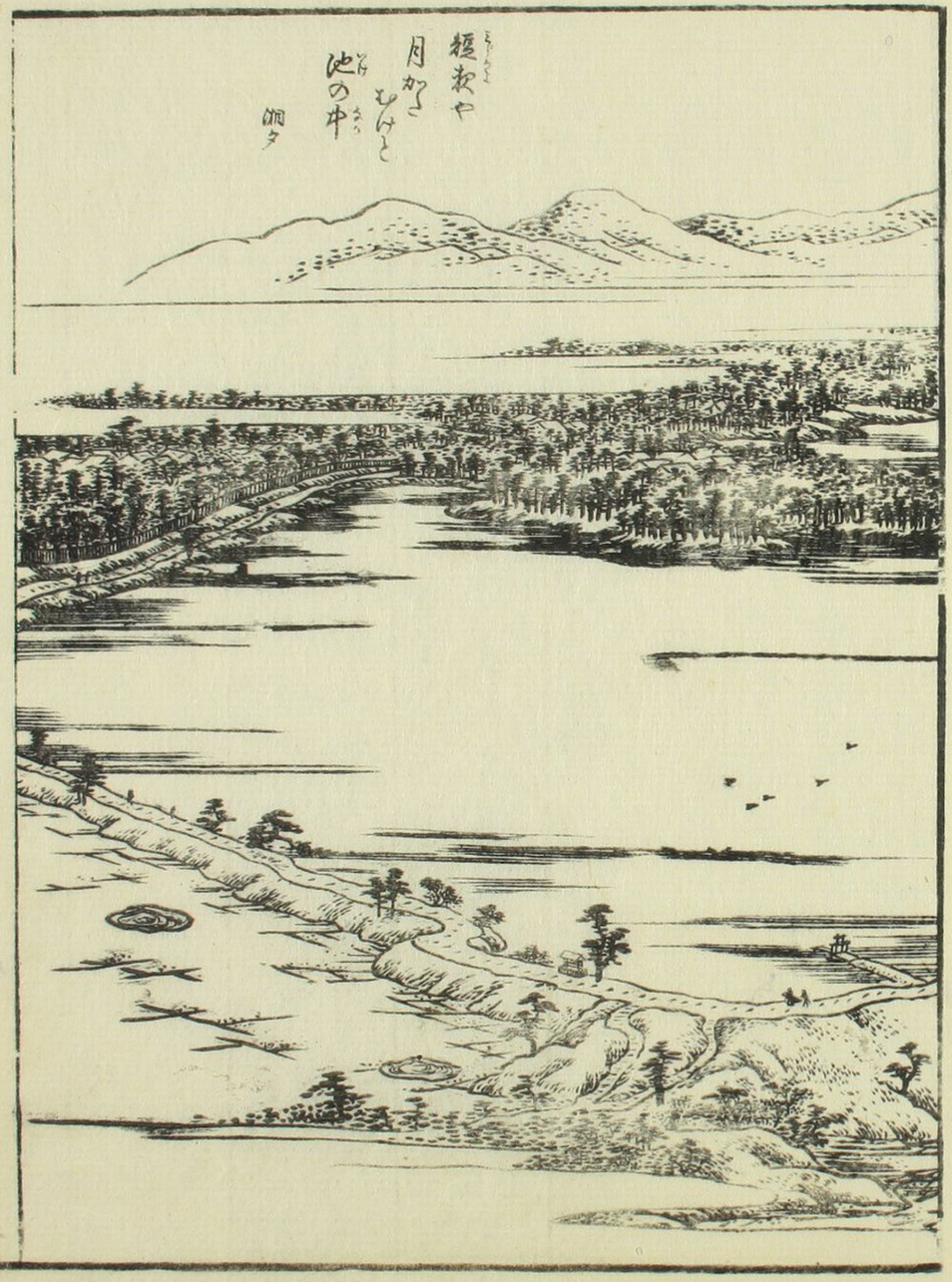
日高臺古蹟 日置荘 氏の抱所 [illegible] 天正の乱に古跡顕 [illegible] 今田圃 [illegible]
[illegible] 日高と号 [illegible]
日本紀曰 垂仁天皇三十九年十月五十瓊敷命 [illegible] 日置荘 [illegible]
於芽渟菟砥川社 宮作 [illegible] 一千口 因名其 [illegible] 謂
川上部亦名曰裸伴藏石上神宮也 命五十瓊
敷命伊勢主石上神宝云云 又或傳云一十口
の剣也共に十箇の品部 [illegible] 五十瓊敷命に賜 日置氏を其十
箇の主人 [illegible] 日置氏の祖なり
称し累世に伝れ今の日置氏の後裔にあり 寛文八年 親族泉州 池
夢徳稲荷祠 [illegible] 氏の家を [illegible] 夢を [illegible]
田郷 [illegible] 屋氏の家を [illegible]

祀る也へふ名 [illegible] 又此門前 [illegible] 日祀祠あり 今三十番神と称
傳ふ 観者堂あり
油 池 [illegible] 村の東の方にあり長サ十二間 幅弐間 日置氏抱所
今も時々池れて [illegible] 光あり [illegible] 光義 [illegible]
見へ [illegible] 又中 [illegible] 権徳 [illegible] 霊泉の [illegible]
大野関跡 [illegible] 村の西にあり河泉 [illegible] 国の界
高野山の道 [illegible] 氏の軍 [illegible] 士 [illegible] 関跡
建 [illegible] 害と [illegible] 元禄年中田圃 [illegible] 今
関 [illegible] 新田 [illegible]
狭山神社 延喜式曰大月次新嘗 三代実録曰貞観元年正月授
例 [illegible] 八月廿六日半田新町池尻 従五位上 狭山大田の間にあり 今牛頭天王と称
等の社居神なり
狭山堤神社 延喜式曰大月次新嘗 三代実録曰貞観元年正月
授従五位上 狭山池の東明神山にあり 狭山池中の
[illegible] 神 [illegible] 例祭四月十五日
秋祭八月十五日
名産蓴菜 狭山池より生じ 美味なり

蓴菜や [illegible] 水の色 西秀

東餘下川 [illegible] 源狭山池より流れ 東野 蒼生 河原 [illegible] 村にあり 丹山郡 八一名東渠
西餘下川 [illegible] 源狭山池より流れ 猪田 [illegible] 郡 [illegible] 八上の郡界 [illegible] 丹山郡にあり 八一名西渠


狭山池
みそらゝ
まいらもかゝ
ゆゝかゝん
狭山の
池れ
ねの
ちゝろへ
寺房


短歌や
月かゝ
もみと
池の中
四夕

狭山池 狭山村にあり 郷郡 天北 小山田の二溪より流れ池となる 周廻を里半 潤す十五万三千 落五坪 流下五十三箇村の田園を潤す 狭山村新田の郷民 式池祭 守護 狭山の池は往昔大なる湖なりしが 仲寅 塩川百首 長海と狭山の池は往昔大なる湖なりしが

六帖 ながらへて山ちかきの池乃ゑりに 紀寅の絶えぬるかぎりかな 僧人

日本紀曰 崇神天皇六十二年秋七月詔曰農天下之大本也民特所以生也今河内國狭山埴田水少是以其國百姓惑農事其多開池溝以寛民業

續日本紀曰 天平寶字六年夏四月河内國狭山池堤決以單功八萬三千人修造畢 元年 後世永孫 千中安 見天作 守重修 又慶長年中 庁桐東市正 修補 式那山 或云 池 慶 石樋 造 尺八樋 慶長年中 小和田久兵衛尉 ゆ者 絶 天下尺八樋の始 形

式池 池 国 一 池頭 潤 風生 細浪 潤

花落 流 紅鱗 薄紅 逐 春 遊

自警 魚 窺 池 魚 深 岸 楊柳 葉 拂

河四八二十四

流 秋の月 二千里乃 新 流 映々 むら

漢の武帝元狩三年 堀 岩 石鯨 作

昆明池 比せむや

丹北郡 丹北 丹北の郡 丹北 又丹南 式 東 志紀郡の界 限 西 丹北 丹南八上二郡の界 限 南 丹南 郡及接列 住吉郡の界を限る 高鷲原陵 号 九山陵 池

雄略天皇陵 帝陵記曰 陵所 今河内國丹北郡高鷲村 周廻百歩間 日本紀曰 大泊瀬幼武天皇 武烈 号 仁德帝七十五年 崩 生長 倭 健 神光 崩 治世廿三年

忠臣隼人墓 日本紀云 清寧帝元年十月 雄略天皇を高鷲原に葬る日 隼人陵の側 書 哀 雄 食 禮 葬 有司 墓 陵の北 造

阿保親王故蹟 今東阿保 西阿保 阿保 系 舎 詳 墳 拵 平業平の父

親王池 門保村にあり親王の殿舎これより近きにありしとなん一説に兒池ともいふ傳云
むかし一婆兒有りて此池に溺れ死す父母これを悲傷して
池中に高サ五間の塔婆を建て其冥福を修す年を歴て塔婆朽ぬ
されど里人嘆んで年のごとく建るなり

来目皇子墳 河内志に丹北郡大塚村にありと云り来目皇子は用明
天皇の御子にして聖徳太子の舎弟なり

日本紀云
推古天皇十一年春二月癸酉朔丙子来目皇子薨於筑紫仍驛使以奏上爰天皇聞之大驚
則召皇太子蘇我大臣謂之曰征新羅大将軍
来目皇子薨之其臨大事而不遂矣甚悲乎仍
殯于周防娑婆乃遣土師連猪手令掌殯事故
猪手之孫曰娑婆連其是之縁也後葬於河内
國埴生山岡上

貴峰師云此皇子の墳は河内志に丹北郡大塚村に在と誌されども埴生山の
岡上といへるに是ならば埴生山とい ふは今羽曳山やといふ山脈あるくの方
なる野村といへるはあやしけれ
坂本の東なる野上村の東に坂ありて登る其傍に塚あり其塚の土を穿て伊賀村の領なるや其塚のさる処に墳生地
あり此所に一の古墳あり此上の蓋石あらはれ其三枚を
みしく正南にあたり壙口あり上の蓋石あらはれたる処甚大なる
先の年此石を剝とりて石の方に作らんとて其三枚の石を
再び剝るといへく其の石棺に鏤て其剝りし付たる所にふさぎ
あらく剝澤を止るといふ壙の広さ六尺ばかり内へ入る事武間半ばかり
にして一隅あまさし左右上下とも廣く横たる石にて長さ丈
五六尺餘其ひろさ所に水滴しりその深さ二尺ばかり底に淳する石ぬし
むかし石槨をかざり漆くありしなん今は石ありて左右の石装しく磨

うかし此墳およそ上あくる来目皇子なりとん墳生山の岡上といへり
日本紀の文によく叶へりと云
土人此墳を門保親王といふは誤なり按るに一説に荒塚あり冢を
御墓といふ是れ親王の墳なりとん是門保親王の塚なる按列莵原郡打出村
上方武郡許にあり摂津名所図会に出せり都て高貴の塚は
殿舎の地所領の地なりとも多く葬らる事多し花園帝
の陵なる七所あるといふ
あり

天満宮 此塚の上にあり祭る王子の靈なると此大塚村等の生土
神とし祭る六月廿五日

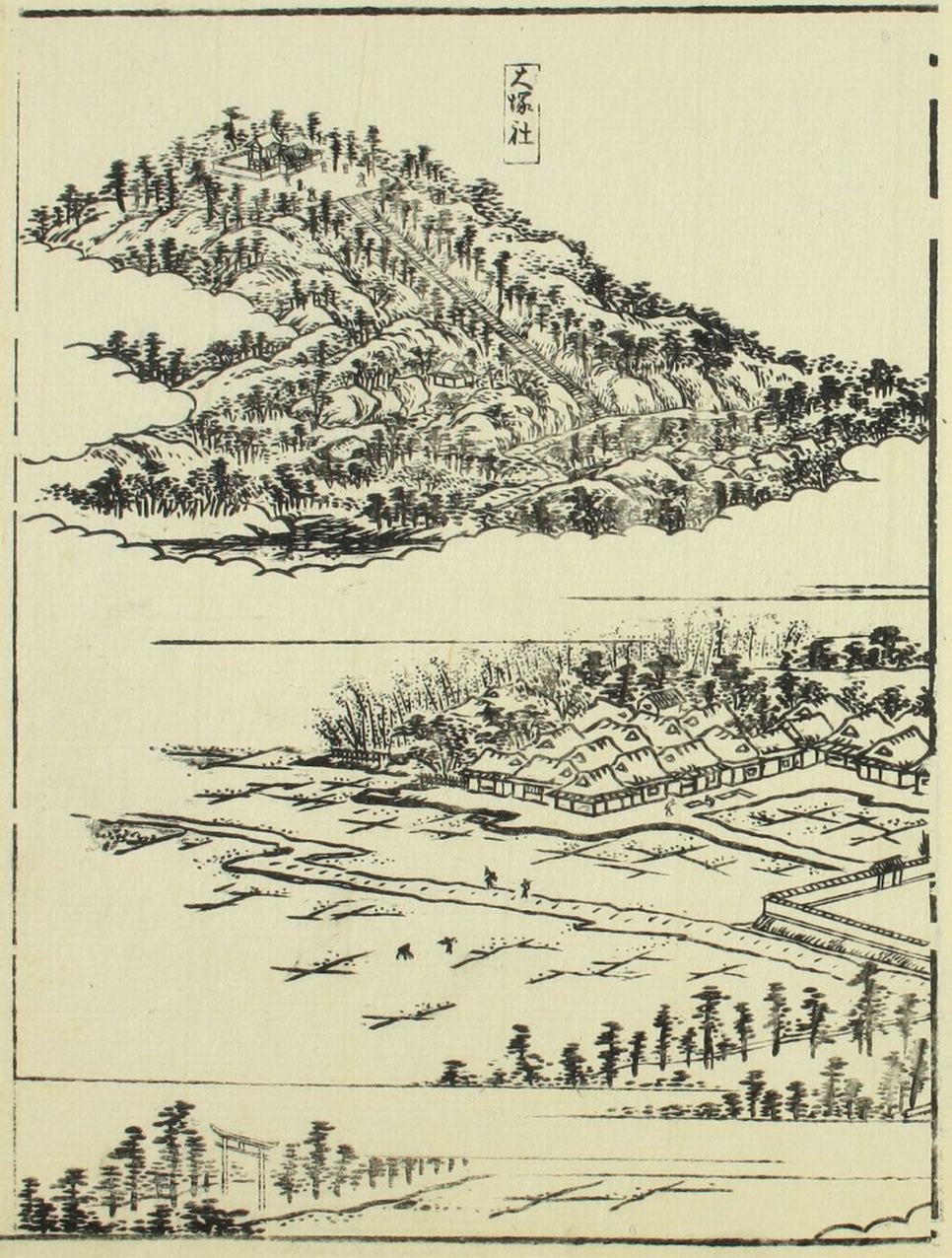
紫籬宮 松原村上田廣庭神社の東北を以てしる都しかに半
六年今封境詳ならず

日本紀云
瑞歯別天皇反正天皇去来穂別天皇同母弟也去来穂別天皇二年立為皇太子天皇初生
于淡路宮生而歯如一骨容姿美麗於是有井曰
瑞井則汲之洗太子時多遅花落有于井中
因為太子名也多遅花者今虎杖花也故稱謂
多遅比瑞歯別天皇中略元年冬十月都於河
内丹比是謂柴籬宮當是時風雨順五穀成熟
人民富饒天下太平是年也太歳丙午
正月甲申朔丙午天皇崩于正寝六年春

廣庭神祠 松原荘植田村にあり今天満宮と称す近隣六ヶ村の生土
神とし例祭六月十日宮寺を廣場山観念寺といふ

田坐神社 田井城村にあり延喜式出又三代實録云貞観四年四月
授従五位下五月列官社今八幡と称す

笠離宮旧跡
菊渓
其いろ〳〵の
白し外
櫻甲
天満宮
祝壽


天塚社

酒屋神社 ニ宅村の西ニあり延喜式出三代實録云貞観七年十二月授二従五位下一今權現と称す此所の生土神なり
瓜破波四 志紀郡ニ流れ出る水邑瓜破波ありて柏原村
樟本神社 鎌倉延喜式ニ志紀郡ニ載す南本郷村ニあり布都明神也
称して物部守屋の霊を祭ると云日村ニ日羅寺あり
本尊某仏如来い
聖徳太子作也

守屋城址 南本郷村ニ北本郷村西村の間ニあり小本郷ニ古城郡ニ属ス
編村城と號す
太子傳云守屋の城中ニ東ニ流る百濟川西南ニ堀を穿ち矢倉を四十
八ヶ所ニ構ひ城中に高サ十餘丈の櫓木あり櫓木
城中にひし瓜荒城の初熱田の矢倉ニ編瓜北立の菩薩と宮ヘ矢を
掘り車成陣ぐき中ニ入れ小本郷ニ三日申の刻ニ物部布都の神
矢を以て太子の陣ニ矢を射る其時太子跡見赤檮ニ命
ド て定恵の弓ニ六ッ目の編矢四天王の射させ矢を
たし先と射に其ッ矢遠く飛ぶ
ゆれを守屋逆ニ木の上ニ落ちる

志紀長吉神社二座 延喜式云大月並新嘗三代實録云貞観元年
大嘗會の所時日蔭夢瓜貢ス 長原村ニあり日蔭明神と称す
上貢ニ非ざるよりい神人と云ども漫ニ見る事不得ず又社司ニ
家ニ長久永義年中の神祇官符藤む者社那月延喜式ニ
相遠し 古老傳云此地鷹名長吉後ニ名ッて二ッ也 那を名一字

瓜破を西を村富と云ひ東瓜
志紀ニ属し淀川ニ入る郡丹北ニ入る
瓜破 東瓜破西瓜破二村あり土人云むら法大作往来
中臣須牟地神社 任道村ニあり今住吉と称す延喜式ニ称す
國使泊ニ於住吉津ニ是月為吳客道通磯歯津路
名吳坂
萬葉集曰住吉爾住道爾昨日見之憑忌貝事二
四有家里
阿麻美許曽神社 鎌倉延喜式出南拓本村の南の方天兎丘ニあり土人云
祭神中午頭天王東ハ妻日西ハ陽子此道灌七ヶ村の
中居神形りむら此地ニ行幸大士
住吉
布忍荘 堀村白井村高本村清水村更池村東代村落六ヶ村ニ
土人布瀬と云むら此地ニ伽藍あり
古佛更池村の多門院ニ毘沙門天向井村ニ布忍山永興寺あり其
本尊十一面観世音の行基の作長四尺八寸ニ分高本村ニ布忍山東ニ
ありて本尊十一面観世音の金銅佛
ふく唐作長九寸許
布忍川 水源狭山池ニ流れ西ニ流れ下り丹南八上の郡ニ流れて
東代更池東我堂西我堂を流れ末ハ新大和川ニ入
紅葉
夕ぐれふ大ぬ吹れい事忍川ちぐれ何丈何尺ありぬ 秀雄
正一
夕立て大ぬ出れを布忍川浪い敷ふく幅も広れぞ 浮久

八上郡 東南ハ丹南郡の界を限り西ハ泉州大鳥郡の界を限りに北ハ丹北郡及び摂州住吉郡の界を限る

丹比行宮 小寺村をいふ天平神護元年十月 帝和泉国日根郡より還りに至て翌日弓削行宮に幸し給ふ

巨勢金岡故居 金田村にありむかし宇多帝寛平年中画工金岡此地に住ん 伝云宮中紫宸殿賢聖障子に中古の名臣三十二人を画せし事今に至て例ありて金岡が規範とせられしとかや

金岡淵 同村にあり又巨勢渋宗よつて此地名あり

金岡神祠 金田村にあり一説に金田ハ金岡の誤字なりし 祭神牛頭天王住吉山王なり里諺云巨勢の金岡が霊を祭るなりと云
又本地堂に薬師仏 長壱寸八分 春日作 聖観音 長弐尺許 法道仙人作 倶に観音坊に安置す

登蓮法師絲薄古蹟 同村の絲薄山光照寺これ也法道上人の草創にして登蓮法師此寺にありし故に絲薄と号す 伽藍巍々たりしが嘉暦年中の兵火に罹る其頃本願寺第三代覚如上人此地に百日逗留して浄土真宗と成 登蓮法師の墓ハ金田より三十町斗南阿弥村にありといふ

秋毎に積にまさりけ糸薄くれかゝみとも見ゆる　登蓮法師

須牟地曽禰神社 延喜式に摂州に出 南花田庄村にあり今勝手明神と称す 此所の生土神とす

家集
住吉の二路なり道なりしを人にまよひぬるをいふなれ　家持

名産蘆 南花田村にあり 載て筆の帽とす

松井 同村にあり盛暑に夏冷なり 其味最美にして此辺の名水なり

渋川郡 東北ハ若江郡の界を限り西ハ摂州東生郡の界を限り南ハ志紀丹北の二郡の界を限る

渋川神社二座 植松村にあり延喜式に若江郡に出今天神と称す 此所の本居神とす

龍華寺古蹟 同村にあり訓にて龍花寺といふ

萬葉
橘の寺の長屋に我ゐねしうなゐはなりは髪あげつらん　読人しらず

続日本紀云 神護景雲三年 天皇由義宮に行幸し假に肆廛を龍華寺の西の川上に建て河内の市人を駈りて是に居らしむ 陪従五位已上私の玩好を求めて其間に交関を車駕これを臨みて遊覧し給ふと云云

此古跡を今市場といふ又龍華川 龍華堤 龍華橋 龍華樋あり 土人橘の辺をいふ橘島ハ若江郡東弓削の内なり

万葉
たちばなのかげふむ道のやちまたにものをぞおもふいもにあはずして　我下衣　読人しらず

跡部神社 亀井の属村跡部にあり延喜式出 此所の本居神とす

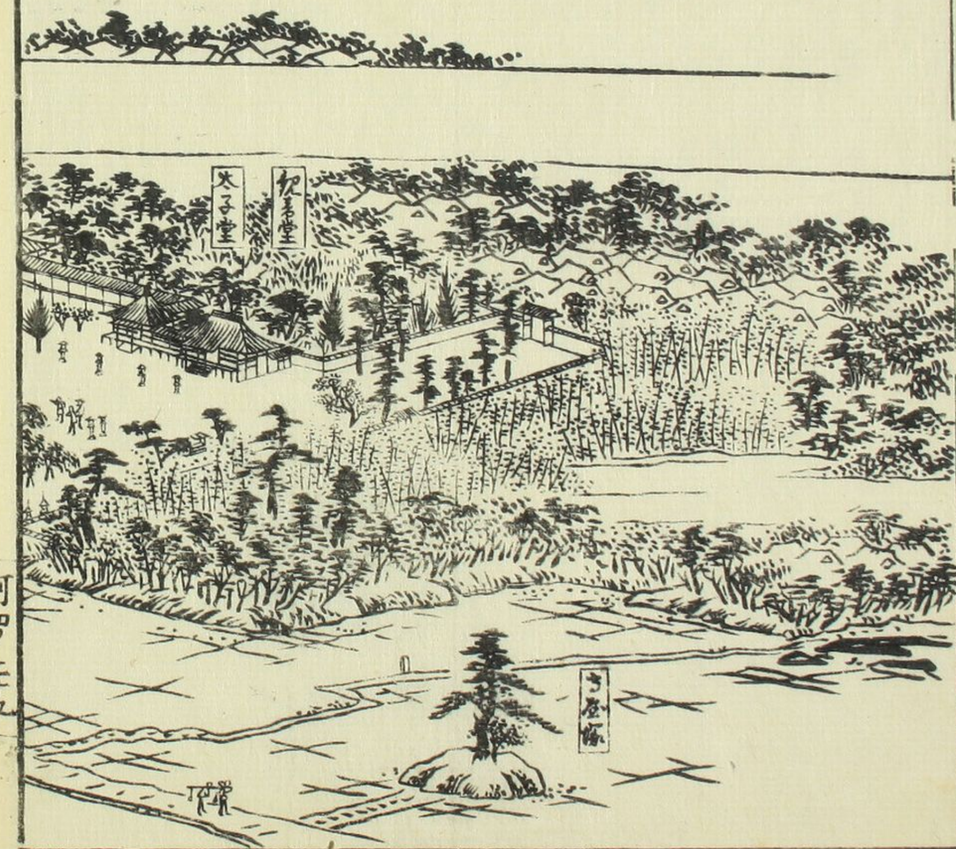
真観寺 亀井村にあり禅宗京師南禅寺今帰院の末寺なり 号松山真観護国禅寺と号す
本尊十一面観音 恵心僧都の作 長三尺 当寺ハ永享年中尾張守畠山満家の建立なり 法号真観院殿一品
尾州大守道端大居士 永享五年九月十九日卒

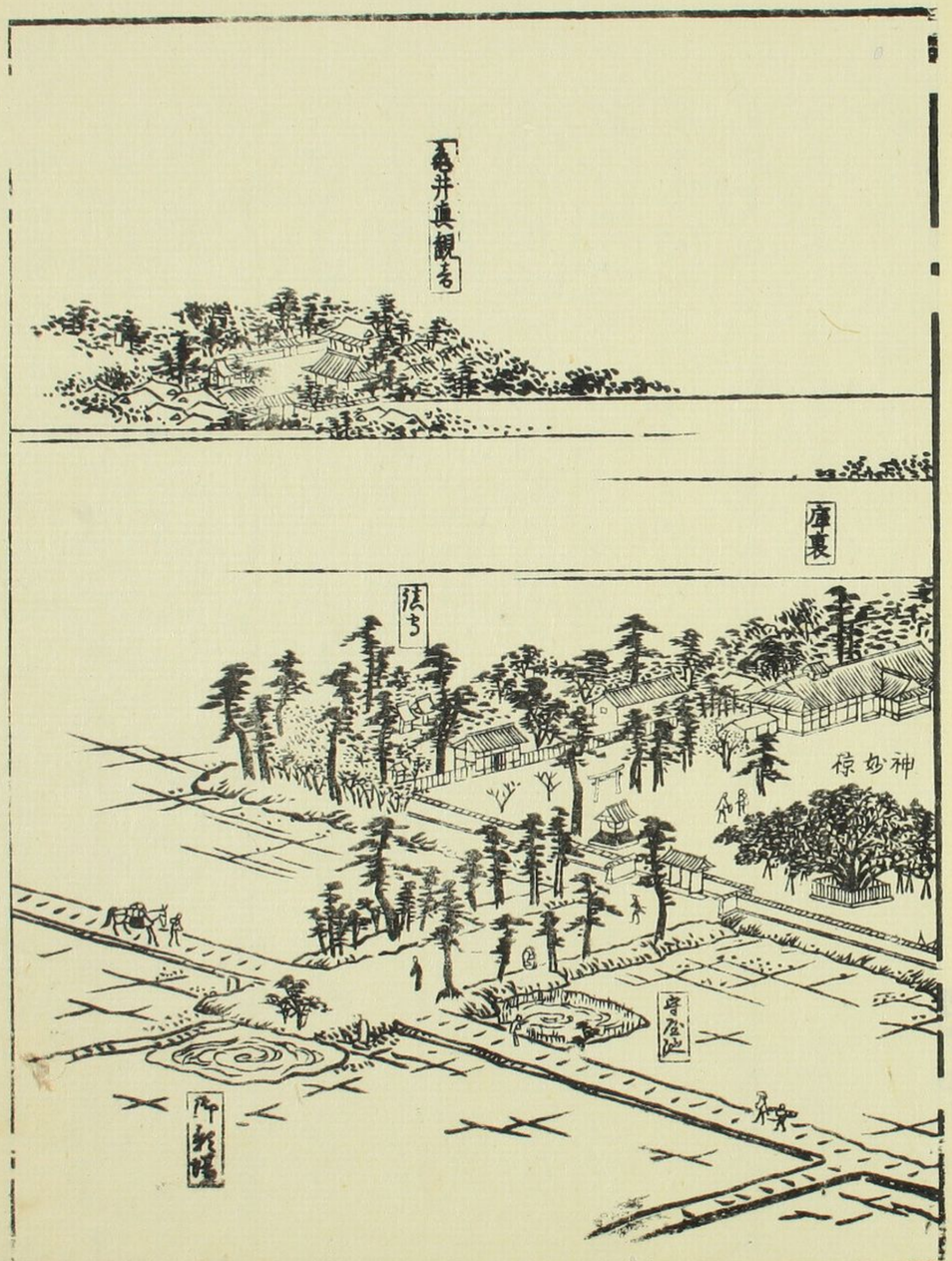
畠山満家墳 当寺にあり

亀井 いにしへハ亀井村にありしが今涸れて涌出せず

下太子
將軍寺
神妙寺

ひくに　実や
かくれん坊を
ふるさと
浪花　八十四翁　魚丈





椋樹山大聖勝軍寺　太子堂村にあり一名䑓成就寺或は野中寺と云ふ　里俗に椋樹寺又は下の太子ともいふ　真言宗

右大臣実隆公天文の末の頃紀行を見しけれぬひ吉野より高野へ詣るとて道の紀に云　神妙椋の木のある寺にまいりたるに彼本尊を拝しおがみ奉らんとまうりたるに御影新造の形をかいまみてかし案内する人もそうふにてひけれゝり

愛らしてきくきらりかけんむくの木のむくはえてまて面影

いにしへの跡も本姑見ん中にあめて駒引むくあまたん外州　全

稱名院

本尊聖徳太子植髪御影　御自作十六歳の尊影　弐尺八寸許

観音堂　太子堂の右にあり本尊如意輪観音長三尺　太子本地佛とられ

神妙椋　堂前にあり古木にして椋の中空虚なり　馬蹄石　椋の木の下にありて太子軍馬の蹄の跡石面に残る

額　植髪太子と大聖勝軍寺の額二ヶ所にあり寺傳に太子の御筆なりし銘しも分明ならず

鎮守　稲荷　弁財天　天満宮の三社を祭る

丈上宮太子は救世大悲の化現にして天竺にては佛在世の勝鬘夫人震旦にては衡山に数生を経たまひ恵思禅師たりし時達磨大師の教によりて日域　用明帝の皇子聖徳太子と降誕し給ひ二歳にして

御時初言に南無佛と稱へたまひしより諸悪莫作衆善奉行の教を修練したまふ御父帝登極の後太子の奏によつて天皇深く三宝を貴敬し給ふといへども逆臣物部弓削大連守屋曰抑我国は天日嗣の皇孫神代より傳はりて天竺震旦にも勝れたる玄妙なる神國なり然人代に及んでも神武帝より都て一千三百餘年異邦の佛法未傳らざるといへども天下清平にして叛賊なし今西蛮の佛法を尊み堂塔伽藍を建て貢税の地を費し佛像に財宝を散しかへて本國家の災害遠からずあらんとて中臣勝海と語らひ佛閣佛像を焼拂ひ當國渋川郡阿都の宅へ引退き稲村城を築き数十万の軍勢を従へて籠城しける其時太子十六歳にして甲冑を帯し官軍を引率して敵城に向て干戈を動し軍卒を指麾し給ふに然るに太子小勢なれば隊伍破られて兵士逃趨る故兵競ひ逆ふ事既に危急なり聖術をもつて盡く万死一生にれよぶ

たる迦れんとゝもに地をゝしうふむとゝ大木の株あり
其木陰ふ立寄給ひ嘆じて曰我ふ救世の本願あり給ふ今迷
居守屋ら為ふ侵されんとす願い代志雄代救ふ給へ宮ふ可
不可思議なる栽代樹忽ふ株の中現出せたる大ふ喜び御身を代中
に隠しゝふ其株封閉する事のことのゝ敵軍馳来て尋求るふ已た
隠れ給へ空退く後株樹又敢開して左る再び生せむひく安穏く即
代樹ふ向ひ歓喜踊躍して偈を誦して曰神妙株樹悲母木我身出
生廣大恩紹隆佛法今成就。日日影向不退轉ふ唱へ則秦川勝を召て
白膠木代ふんく四天王の像を彫刻して四居（秦我大臣 迷見赤檮 妹子大臣 秦川勝）の願数
ふ叡免我をして敬ふ勝しめ給ふ讓世四天王寺代建んと志願代
起させ赤檮城ふ向ひ給ふ命じて矢を射うり
給ふ其矢守屋が胸板ふ中る中ふ一つの檜よう直逆ふ落ぬ秦川勝
走ることく頸代斬倭の池水ふ洗ひ凱歌を上く陣を退たゝふ

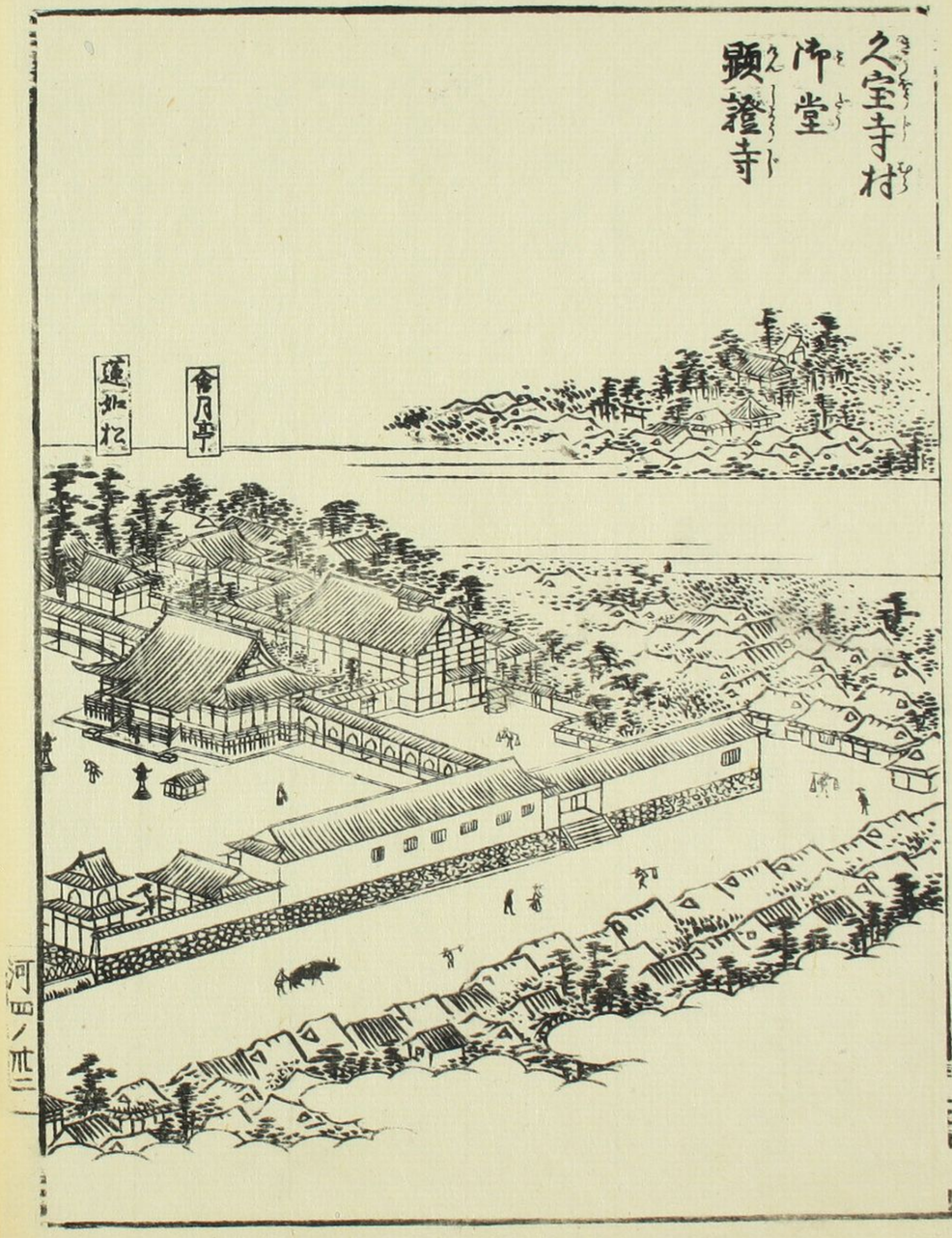
是偏ふ株樹の功なれと戦勝ふ我輩ら居則　天皇ふ奏して代地ふ
伽藍を建く神妙株樹山大聖勝軍寺と号しを子十六菜の聖容
代自彫刻給ひ生身の御髪を植させ給へふ（已上太子傳當寺の縁起等の大意）
年紫果り物換を星ふ移りて中頃畠山乳近く慶長の戦ふ伽藍
類焼しむ中ふ十が一ふも及ぶ給れども左ふの正蹟ふく世ふ上左ふ
御廟所御墓山を称し下太子寺屋退治の戦場ふして三宝弘隆
始佛欲降伏の回踪浮圖を信ぜ所貴賤ふ仰ぎ給へ

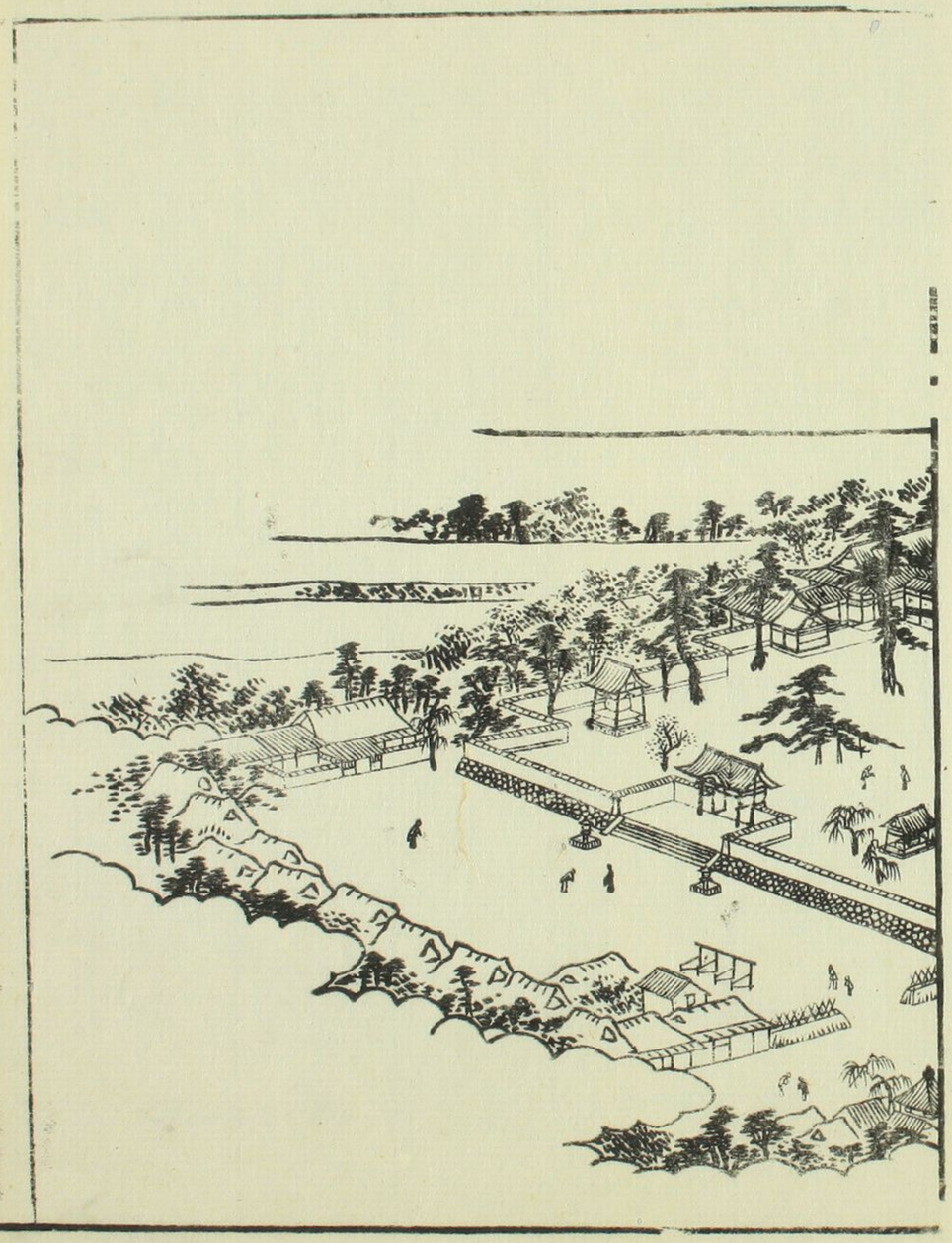
什寶

- 太子御自作四天王
- 佛舎利
- 大般若經（光明皇后御筆）
- 不動尊（弘法大師御筆）
- 三千佛名經（太子御筆）
- 藥師佛（惠心御筆）
- 如意輪觀音（百濟國傳来）
- 經一卷（右同筆）
- 持國天（秦川勝作）
- 毘沙門天（蘇我大臣作）
- 當山縁起（解脱大筆）
- 十一面觀音（巨勢金岡筆）

守屋大連墳（勝軍寺南門前の左ふあり）

守屋頸濯池（勝軍寺南門前ふあり）


久宝寺村
仏堂
願證寺
會月亭
蓮如松



迎松山願護寺　久宝寺村ふあり　浄土真宗ふして本願寺御門跡御建立代く
住侍職　もと久宝寺御坊と称せ

本尊阿弥陀佛　長三尺八寸　俗間ふ聖徳太子作　七高僧の新仏安置ス

宗祖親鸞聖人等身真向御影　蓮如上人真筆　真向の御影の初
天下第一の名作

蓮如松　対面所の庭中ふあり　合月亭　本願寺良如上人始の菓亭
蓮如上人植ゆ　ふく歯ちへうりを

丈當寺ゟ本願寺第八代蓮如上人の建立ふして息第八男法印
蓮淳上人ふ附属し給ふ母ハ石山寺観世音の化現ゟ事　蓮如傳記ふ顕
然ゟ宗祖親鸞聖人の御新ゟ大津近松寺ふ移く骨肉の真影を模し
なるゆ西へ写身の号ゆて宗祖真向号ゆ新の初ゟ當寺御堂四足門書院ふ
迎年再営ふく荘厳美麗ゟ毎時晨鐘の響ゟ老若の門俗神仏
信ゟ敬ゟ渇仰嶽ふ佛恩の稱名日々新ゟ絶ゟ去此不遠の安
養浄土ゟ願ゟ形ゟ

元禄年中故大和川開鑿の地を
今新池寺新田ゟ

麟角堂　泉州縣塁所ゟ久宝寺村ふあり其聖係今里人の家ふ伝ゟ畠山の麾下
其聖係今里人の家ふ伝ゟ畠山の麾下ゟ

久寶寺城　泉州ゟ久宝寺村ふあり畠山の麾下ゟ居城ゟ

許麻神社　久宝寺村ふあり延喜式出今牛頭天皇と称ゟ式所の生土神
式地を許麻荘ゟ社内ふ古剪あり色紙形ゟ書上ふ
題ゟて曰
河州泉川郡許麻荘神武明星澤古哥云
許麻の里沢ゟふ毎ふあやかさん
神武ゟ堀の名ゟ明星澤ゟ杜若君ゟ村の西北ふあり燕ゟ花咲生ゟ首夏
盛開の時花美形ゟ

観音院　社の傍ふあり許麻神社の宮寺ゟ真言宗大悲閣ゟ

本尊十一面観音　久寶寺観音院ふ安ゟ聖徳太子作ゟ立像長
建立形ゟ慶長の兵乱ふ堂舎
伊賀国ふあり国人の多ふ河内国久宝寺ゟ宵縁の霊場ゟ
迷ふかの地ふ漂ゟ堂舎焼亡ゟ本尊ゟ告ゟ人咸驚ゟ則本尊ゟ
の地ふ小堂舎ゟ建ゟ安置ゟ
伊賀ゟ川　水源明星澤ゟ流ゟ
指列平野川ふ入

伊賀ゟ村　伊賀ゟ村西足代ゟ
伊賀ゟ名ゟ
伊賀ゟ村名ゟ伊賀ゟ溝ゟ近江国ゟ
河内国ゟ出ゟ伊賀ゟ澤形ゟ
順の和名抄ふ伊賀ゟ郷ゟ
ふ出ゟ

龍眼泉　村ふあり清徹其味ゟ
乾旱ゟ

横野神社 大池村にあり延喜式出今卯色宮と称す

横野堤 横野社頭の邊なりしが今はさらなり 日本紀曰 仁徳天皇十三年十月築横野堤 云云 むかしは此あたり海濱なりしが此郷内池塘に勝れたる地なれば水も亦鹹鹵なりこれ海の近き證なり

續古今
霜かれの横野の堤風さえて入しほとをく千鳥なくなり　衣笠光俊

都留彌神社 足代村にあり延喜式出今天神と称す此地の生土神とす
當村の名產 藍葉 世に名高し 茜草此の村にてこれを作る

若江郡 東は高安河内二郡の界を限り西は摂州東生郡の界を限り
南は志紀渋川二郡の界を限り北は茨田郡の界を限る

弓削行宮 東弓削村をいふ 續日本紀曰 天平神護元年冬十月の
帝弓削行宮に到りて詔して道鏡に太政大臣禅師の
職を授く文武百官みな
これを拝賀せしむと云云

弓削神社一座 延喜式曰大月次相嘗新嘗 三代實録曰 貞觀元年
正月授正五位上二年秋七月彌加布都神進加従二位
東弓削村にあり

弓削河原 此所の本居神とす故大和川原弓削村の
ほとりなるべし

万葉
真鉋持弓削河原之埋木之不可顕事等不有君　読人しらず

都家 都塚村にあり由緒由義宮に見ゆ又祇園塚弁財天塚などの荒塚
此邊に在て冢の數五ヶ所にあり

都留美島神社 延喜式出 都塚村都塚の上にあり
此地の生土神とす

八尾木鶯 東弓削の西に八尾木村金剛蓮華寺 不動尊
といふあり

右大臣実隆公高野詣紀行云
河内國八尾木の金剛蓮華寺といふ寺ありしてひるにいり
ある人いふやう此八尾といふは鶯まんあち那一家
よふ法は乃尾毛十二枚かぞへられる此所のは尾を八つ
重ねきこゆる
よしいふなり

契りおくこゝに生さきなき鶯は八尾玉椿八千歳の声　称名院

明川 八尾木村にあり聖徳太子守屋との軍の時此八尾木の川にて敵兵
のくびを洗われたるよりて明川といふ

高松重信塚 同村にあり土人高松塚とよぶ
瘧疾を祈るに効あり霊験あり

由義宮 八尾木村をいふ一名西ノ都 續日本紀云 神護景雲三年
十月 帝由義宮に行幸 詔して曰 河内國
西京とし河内職とし 高年七十已上の者に宝物
と賜ひ安宿志紀二郡 大縣若江高安田租の半を免除し又宝亀元年
正月大縣若江高安の百姓の宅を由義宮に入れて其
價を酬ひ給ふ今の別宮都家弓削植松等多くは其故趾なり
又曰同三月に葛井船津文武生等歌垣を供ず

續日本紀曰
乎止賣良爾。乎止古多智蘓比。布美奈良須
爾詩乃美夜古波。與呂豆與乃美夜

弓削寺址 東弓削八尾木の間ふあり 天平神護元年十月捨食封二百戸

長瀬川 故大和川と田圃の用水とする流れ弓削と絳る所謂万葉集に弓削河原とよみたるこれ那り流川郡の界に流れる井田より入森河内ふ立く播州東生郡ふ入

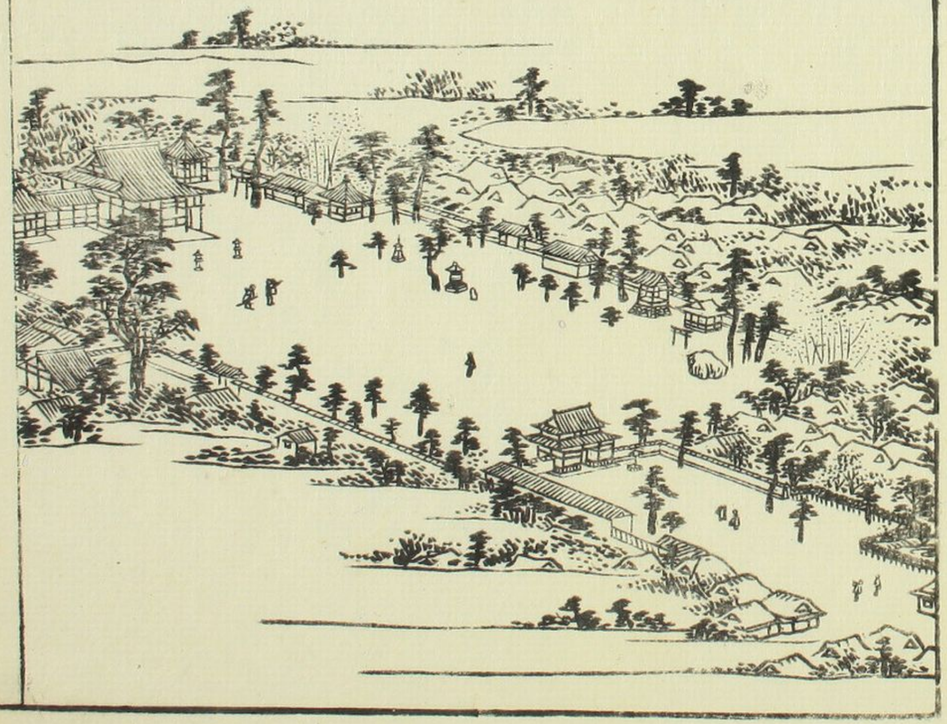
長瀬堤 長瀬川の右岸をつゝみ今ふ天平寶字六年六月長瀬堤決し單功二萬二千二百餘人に役し造し又寶亀元年秋七月志紀郡の堤に役し其功費三萬餘人又貞観十二年七月朝使を遣し河内國の堤を築かしむ成功いまだ畢らず害あり恐れて大和國三歳神大和神廣瀬神龍田神ふ奉幣し雨乞を行ふ同十七年二月右中辨橘朝臣三夏に命じて河内國の堤を築かしむ土人もとより識婦堤と云ふ長瀬二郡ふ老姑多ふ名あり元禄の末年慶安の頃ふ汚されぞ永塵世に歴て

玄賓僧都址 弓削の人ふ姓は淳ふして道鏡ふ信ぜ和尚を通れ弘仁九年六月病中温湯中寺ふて寂年八十

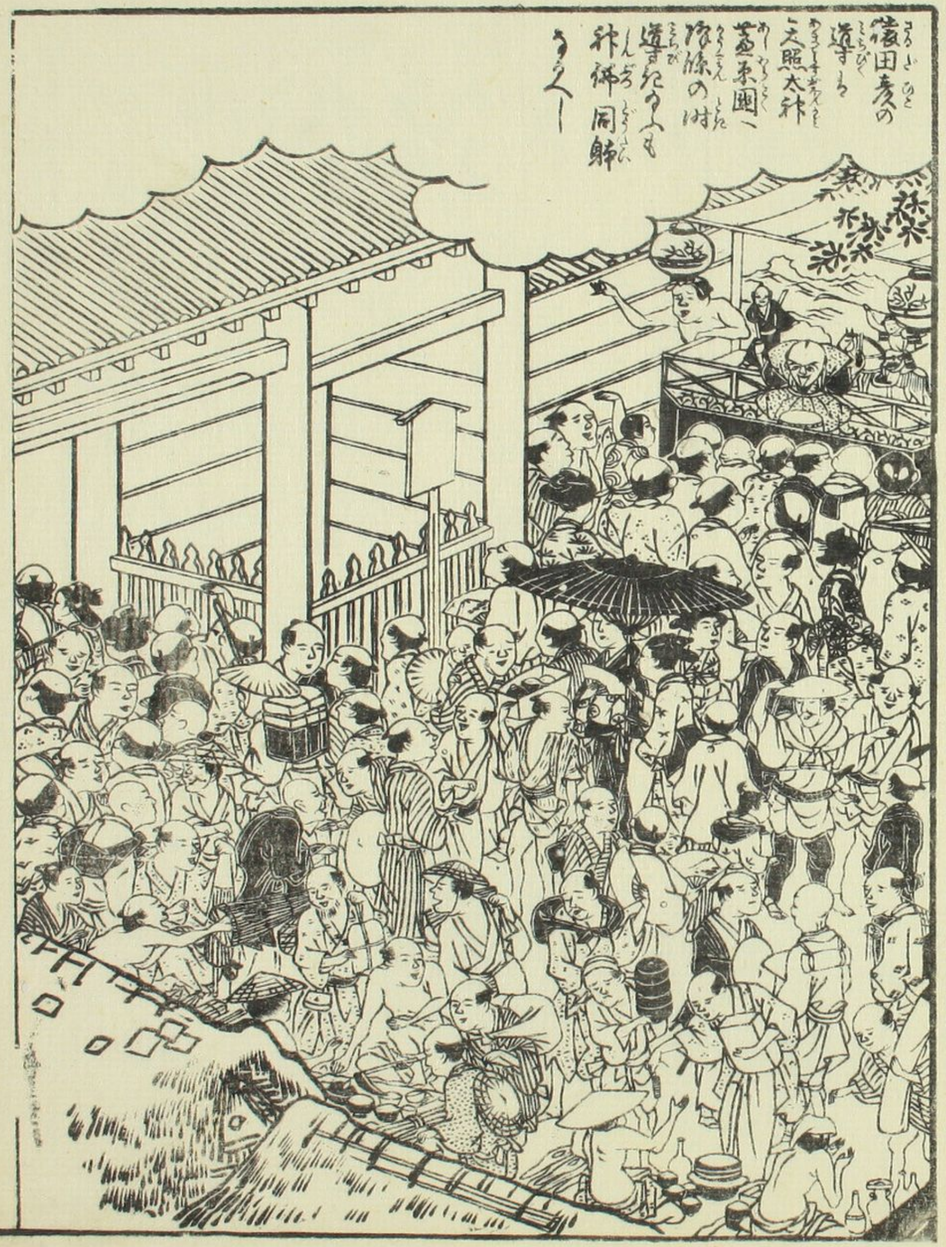
物部尾輿址 弓削の人ふ欽明帝の時大連に任ず帝問ふ吾の事を群臣ふ諮ふ尾輿及び中臣連鎌子奏して曰ふ我國は佛法を敬ふ天神地祇社稷の神を祭ふ今改て蕃神の怒を招ふ恐くは國神の怒を招ふ帝これを可とす

八尾地蔵寺

常光寺



八尾市
毎年
七月廿四日ハ
地蔵ぼさつ
遠近諸人参詣
六道地獄の
菩薩ぞうれん
ものとなりて
善道へ導給
しゅんと
祈ゆるべ
地蔵そのの
盆祭り
猶田麦食
みしくゆ
古屋敷
祭りゆるべ
十九文
子安地蔵尊
河内八尾六


猶田麦の
道すり
天照太神
宮東國へ
家族の
導給ひ
神仏同躰
うゝ

初日山常光寺 八尾西郷邑ふあり 律宗

本尊 地蔵尊 小野篁の作 長六尺

舎利堂 本堂の左ふあり 白河院の御願 阿弥陀堂 本堂の右ふあり

舎利を安置 仏所の鎮守 金毘羅権現社

舎利塔の左ふあり 裏日 仏所の

鐘堂 弦安の作 額 表門初日山 本堂常光寺 俱ふ

鐘堂 額 足利義満公の筆 形り

文當寺は天平年中僧正行基の開基ふく一千有餘年の霊

刹ふ厥后小野篁地蔵菩薩を刻てふ安置 本尊とする

寛治二年 白河法皇熊野行幸の時うた車駕をめぐらされ

仏舎利を寄附 ふ其より年歴ふく諸堂荒蕪

なれども至徳二年藤原又五郎左衛盛純ふ者伽藍悉再興し

荘厳美麗 形り 同三年 ふ地蔵尊を本堂ふ安置 尚ふ再

営大檀那 藤原盛純 虹梁に跨る 舊観ふ復る其後

康應三年 将軍足利義満公 自書の額を賜ひ祈

願所ふ今ぜ 慶長元和の頃 八尾郷 戦場ふ

も多く軍馬の蹄ふ覆く 殿堂の丹青室 々 瓦 純光明

紛れども地蔵菩薩の霊験いむ 今もいちじるく見ふ

戰死碑 寺方丈の庭ふ 傳云元和元年五月五日藤堂嘉諸士

伊地ふ於く合戦 討死の士七十一人の墓碑其文曰

勢州戦死碑

元和元年乙卯。伐阪。我月五日。駕駐沙。公以歩騎五千。營千堺。高山公拜正先鋒五命明日軍道明寺越六日昧爽。木村重成。長曾我部盛親。増田宗盛等。率兵三萬。直向沙旌旗蔽野。公急出驍騎馳躍焉。式部及澤田平先登。兵部左近等死之。既而大隊並進。左指戦八尾帥仁右衛門及氏勝親氏陣亡。右拒戦西郡。萱振帥新七郎及玄蕃陣亡。隊騎家従戦没。各處以羈阪師公子宮内公壻守力闘梅原政武早戦若江男亀死。牧銃卒射背敵不堪保久賢澤田但大島作等狭一撃敗之。渡邊勘継進。磯野平獲宗盛尾盛親到平野米女用戈于若江彦根師遂克重成。越七日。與毛利勝永軍戦。内藏及安並等陣亡。佐伯權及井與落合半岡本弥中往傳最勉。晩門黒門連日。所獲首級八百七十云 命築墳常光寺祀忠魂前年戦死與焉。是役也二帥献言曰公再蒙重任。咸

命為帥。不以死奉戦。无在諸侯矣。嗟行與言符
彼利祿之徒。奚知忠肝義膽。迨百五十年宗國
膺社實其力也。三室遠孫相謀建碣。君侯賜
篆額附銀千両于寺。永充歲祀。以銘屬高文銘
曰

趙武夫　同心同德　人皆股肱
倆俛執職　厥將愛君　厥士愛將
首離不僵　誠勇旦壯　以死當衝
攝軍之善謀　中原抵平　宗祀享休
萬世永存　常光之園　刻名茲石

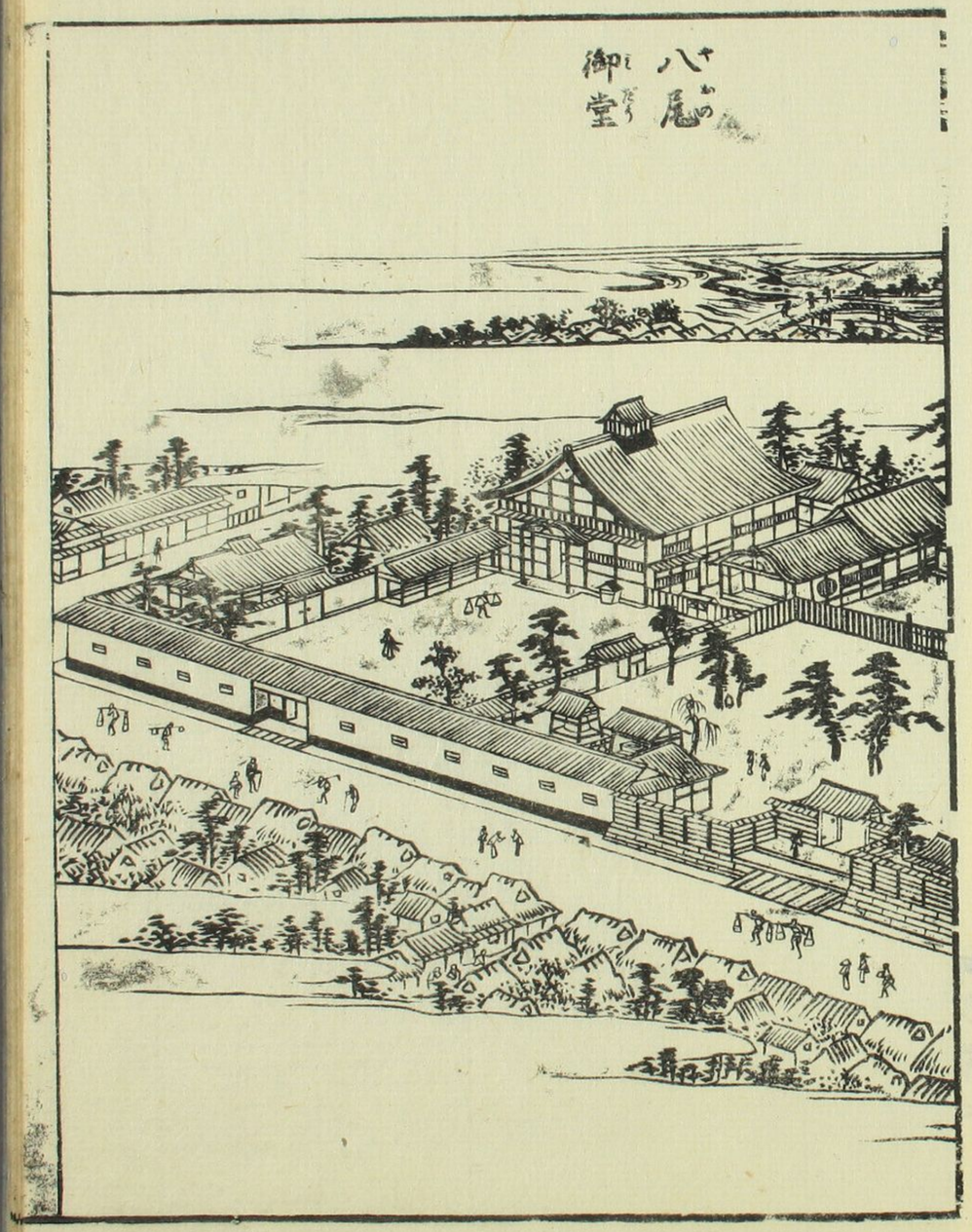
寶暦十四年歳次甲申夏五

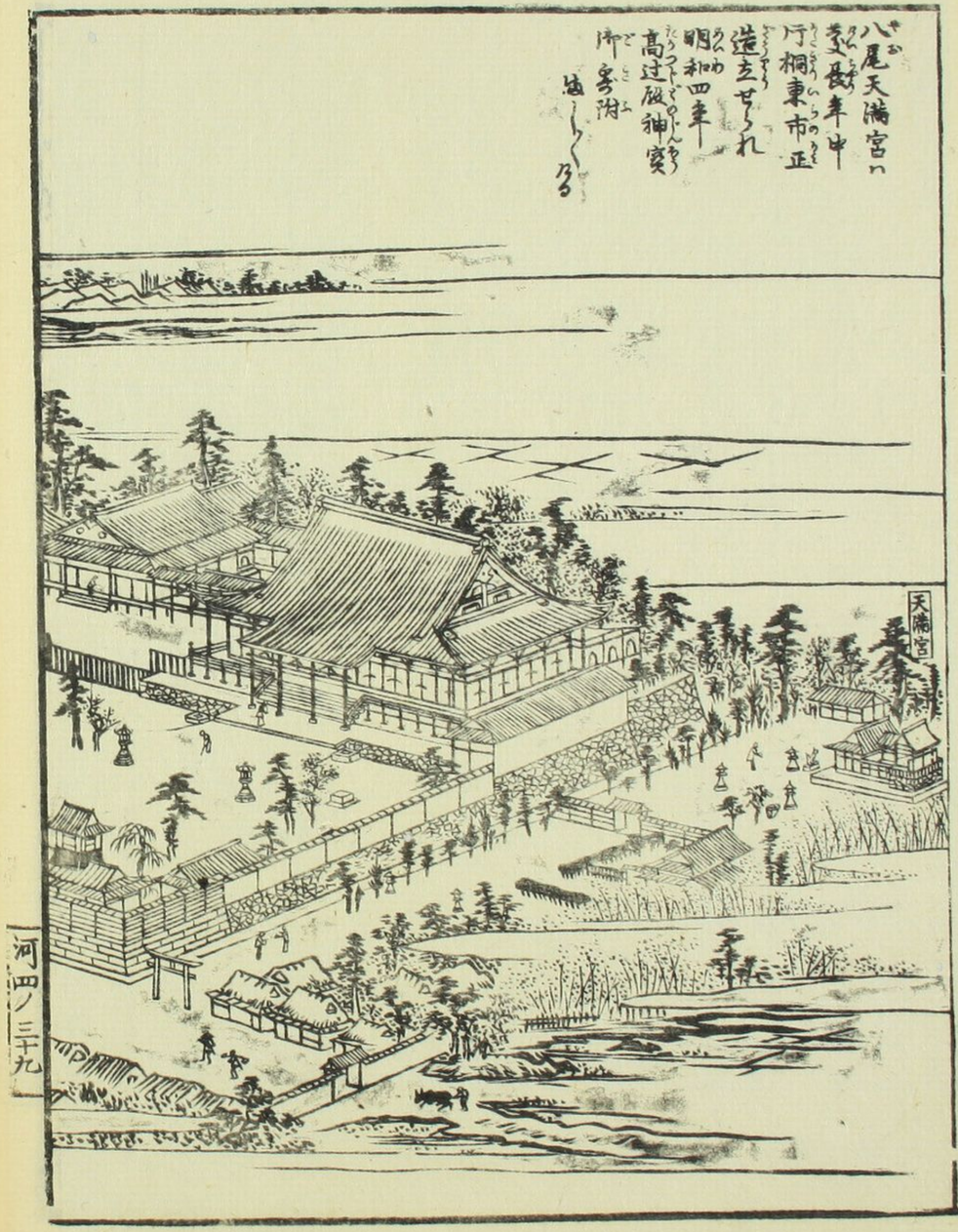
仁右衛門七世孫勝堂喜景
新七郎五世孫勝堂良躬　建
玄蕃七世孫勝堂良演
洞津　勝堂高文　撰
弥二兵衛六世孫桑名一直
勘解由七世孫勝堂氏勝　助工

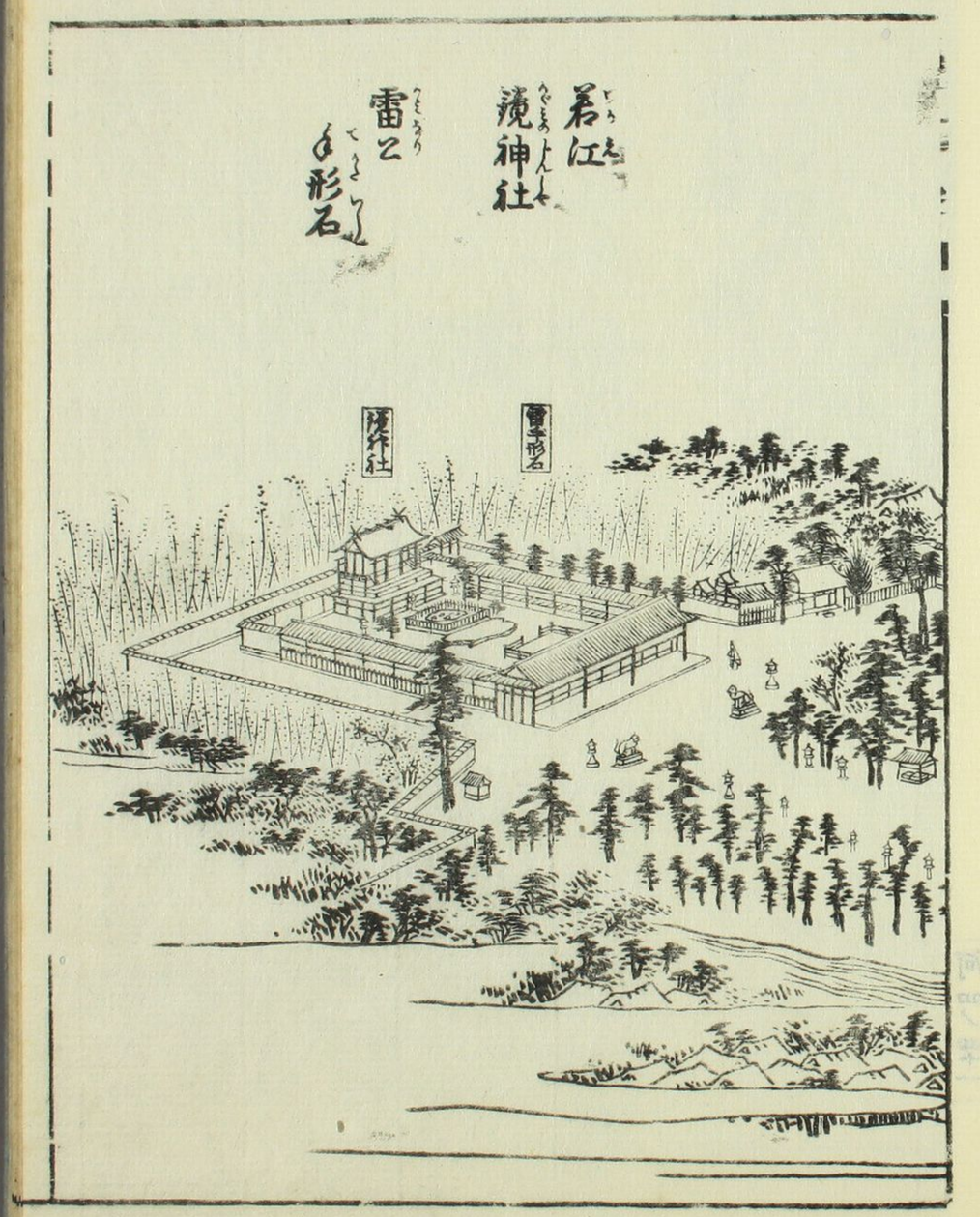
忠貫日月　義凌秋霜
嗚呼勇士　今也則亡

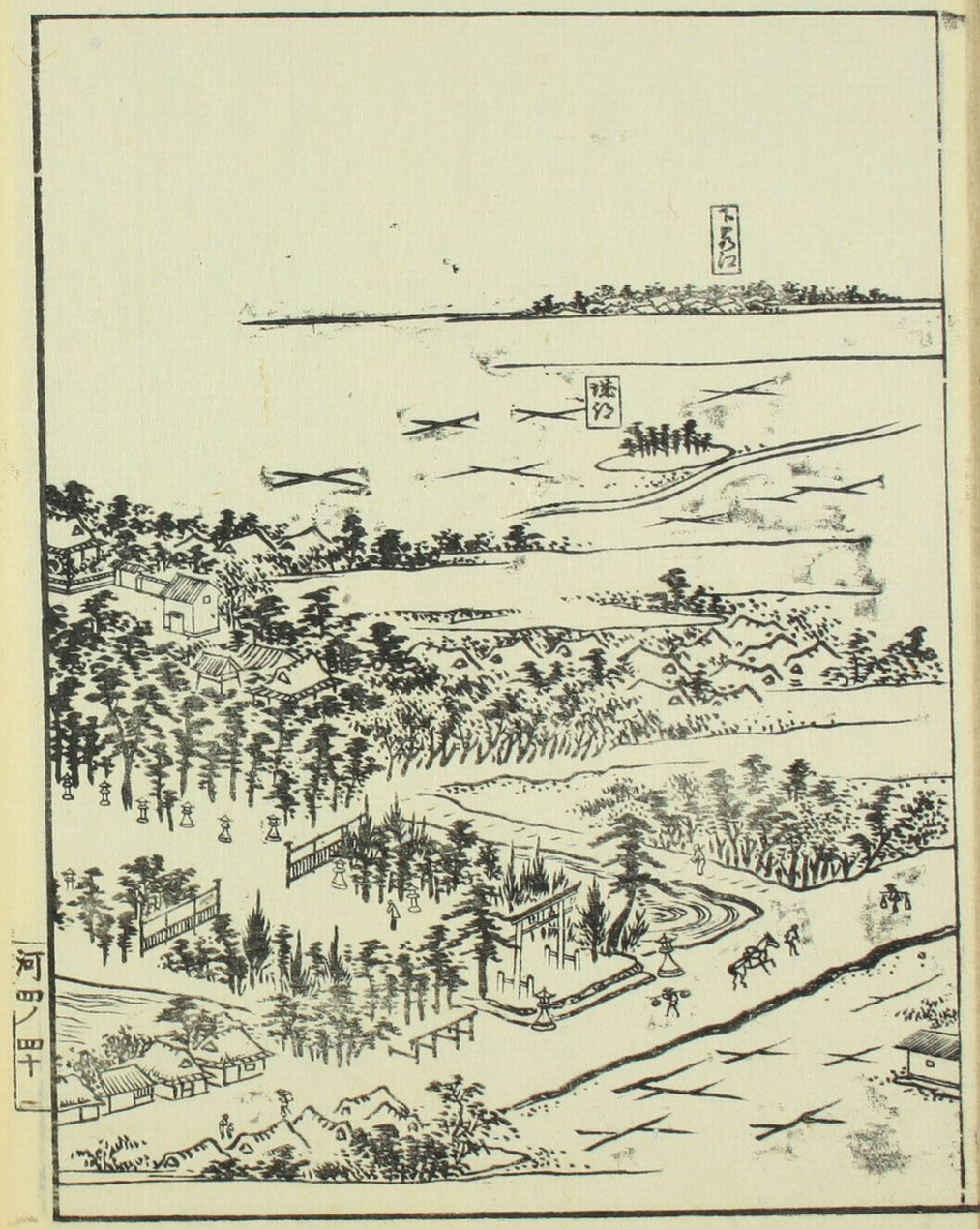
津城ム録
傳長老牌陰偈

八尾御堂大信寺　東本願寺門徒八尾御堂と号す京師
本尊阿弥陀佛　聖徳太子御作長三尺五寸許
宗祖親鸞聖人御影　教如上人真筆世よ
鼓楼　長年中伏見城より移す
成思菴　書院の座敷
空風燈　教如上人の御好
丈巻寺　本願寺十二代教如上人慶長年中北御建立
霊場なり　因迦牟御堂再營ありて荘厳微妙彩画の門
下ろう清し　他力本願ふ帰入し　法性常楽の境に号信し
佛恩を報ぜ　法華猶森の如し　一衆の名報恩講ふ京師より
御門主御下向の折　掬八尾川あく鼓白のり
八尾川　ちゆけ　さゆる鼓の音
栗掬神社　八尾西郷村あり延喜式出三代實録云　貞観四年
授従五位下　同十二月勅預官社　今天王と称ヒ式地の生土神


八尾
御堂

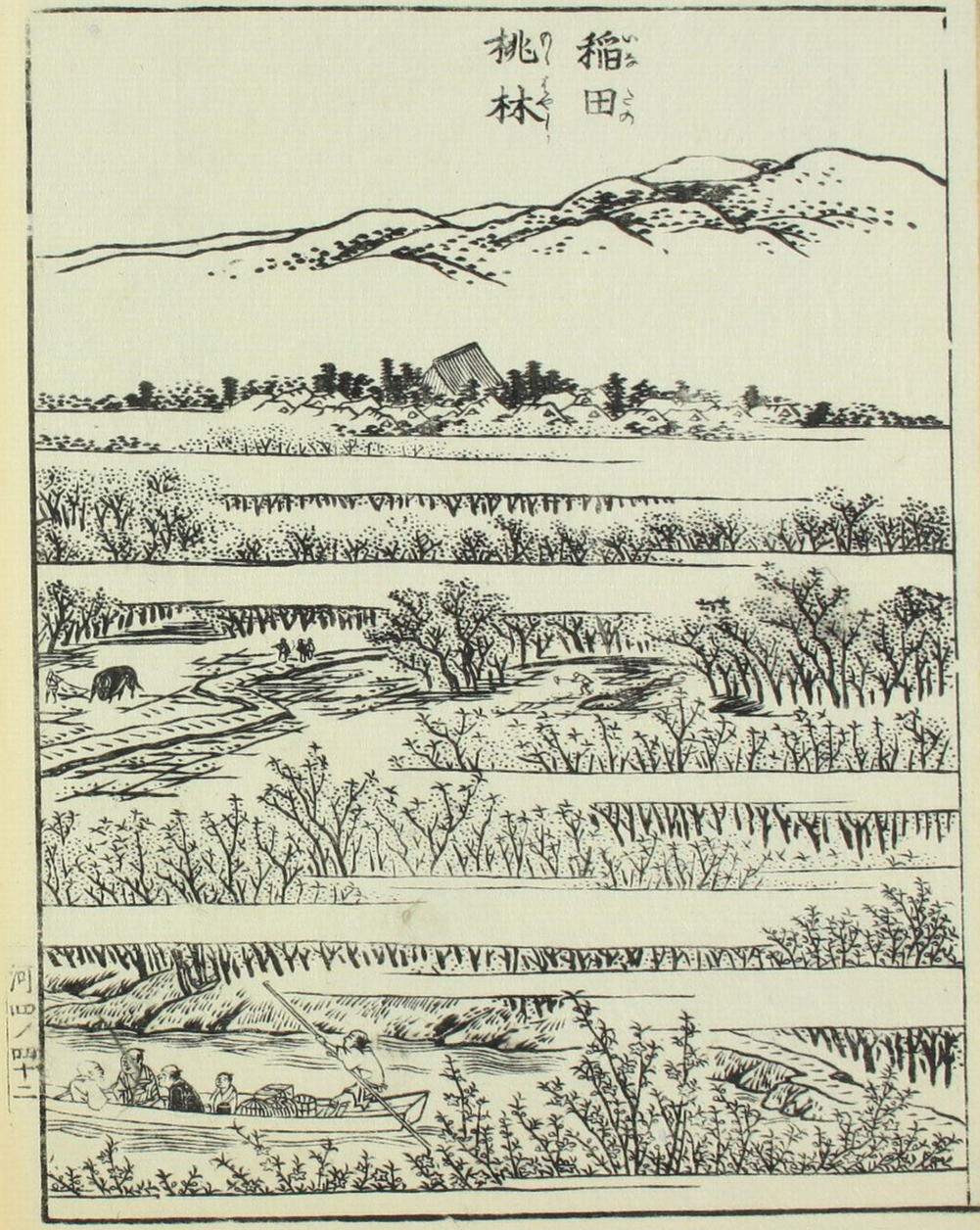

八尾天満宮ハ
慶長年中
内務大臣正
桐東
造立せられ
明和四年
高辻殿神霊
所多附
為しらるる
天満宮


若江
境神社
雷乙
彦形石
境神社
雷乙形石


下若江
楽仏
河内八景十二

石江
忠臣名賢古墳
佐藤言亨の村碑
本村重成墓

今古英雄俱寂寞
斷碑零落後人看
山口伊豆度墳

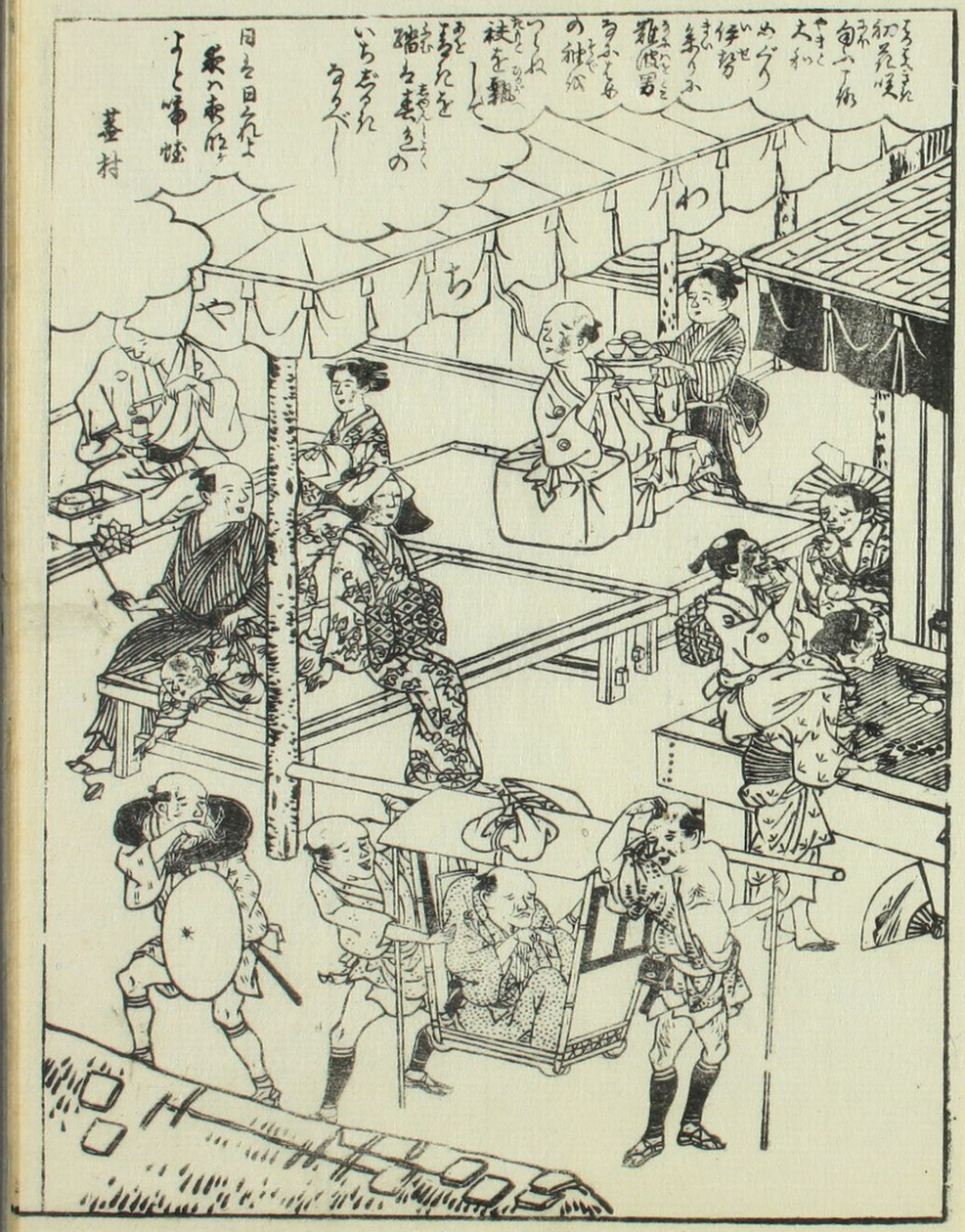


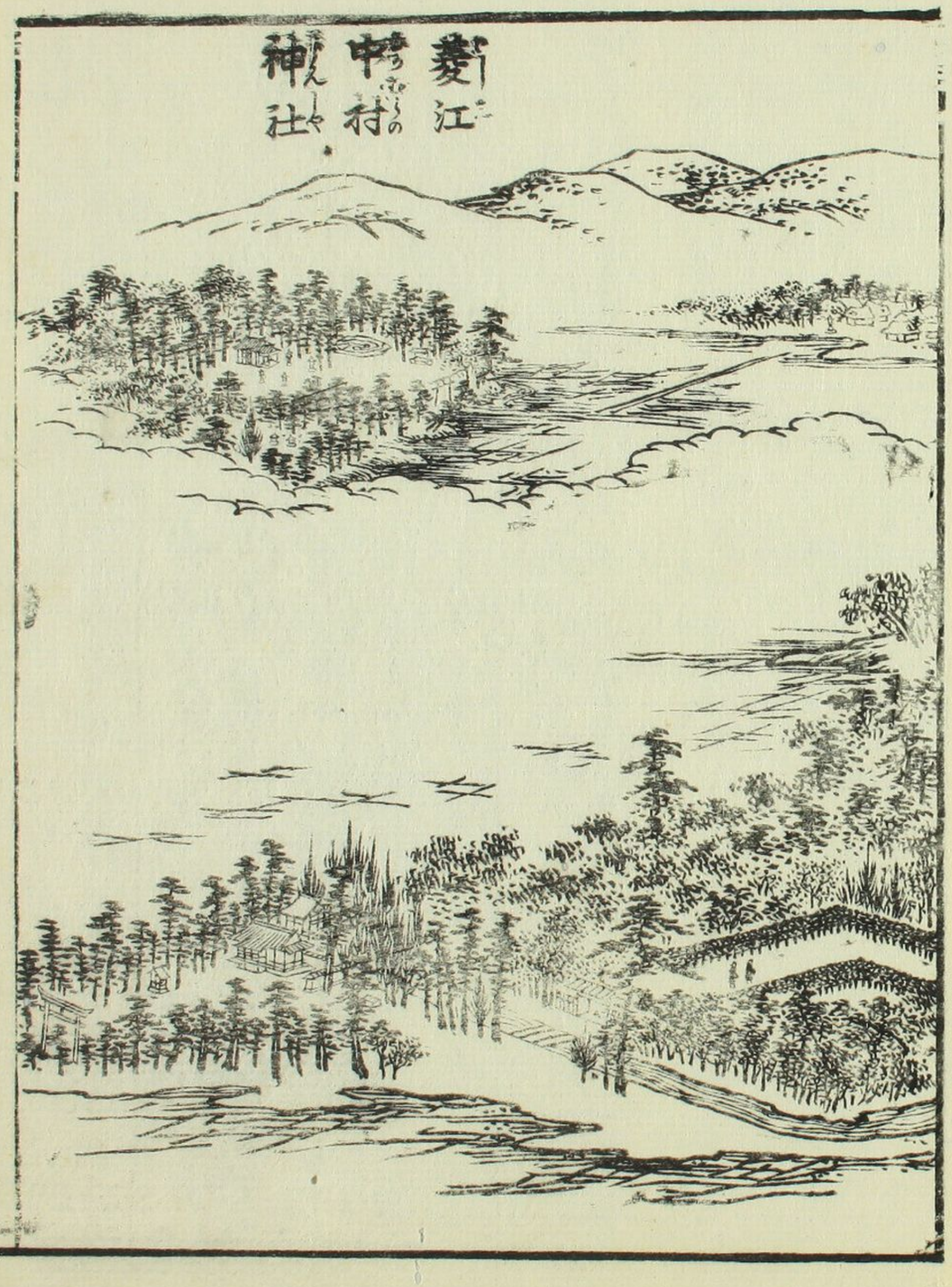
誰家年少
野村西
沙岸停舟
路欲迷
十里桃林
花未落
始知身到
武陵溪

生駒山人

奈良御道

河田八時




菱江
中村
神社

高井田
長榮寺

長柄神社 長八尾村ニあり 鎌延喜式出今ハ廢ス洞也

玉串川 志紀郡ニ流レ中郡ニ流レ中郡の東ハ西都家中野築合荒本等と経て遍田郡ニて菱田郡夜辰川ニ入一名遍川

築橋神 ちなみてのことなれ川ちなみ名なりけり橋むらひふ舟ちなみなれ　昨光

坂合神社 小坂合村ニあり延喜式出三代實録云 元慶七年十二月授従五位下ヲ式所の生土神

若江城墟 初畠山義深の家臣遊佐ヲ義継更ニ互ニ居しめ永禄の末せむ寛正以来政長義就ニ居城ス郡境

天正の初秀吉ニ亡ル 若江城址なり

若江鏡神社 若江村ニあり延喜式出文徳實録曰 嘉祥元年四月授大雷大明神ニ従五位下ヲ上若江ニ下若江ニ村の生土神之例ニ八月十一日

雷神石 神石ニあり土人雷手ニ石 又古代の祀ニ石 焼畑神おふあり

加津良神社 萱振村ニあり延喜式出三代實録云 貞観九年二月授ニ従ニ位式所の生土神

萱振の名 時ニ生土の宮神ニ村ニ松明を振る神をいさむる故ニ放ふ 又地蔵院の本尊ニ阿弥陀の画像恵心の手さし

毘沙門堂其外 伽藍の旧跡あり

石田神社三座 岩田村ニあり延喜式出今八幡と称ス式所の生土神

中ニ式岩紀あり其上ニ三神出現ス 欽明天皇の御宇ニ亀の田園の

これ式ニ社檀ニ建ス陸奥ニ社檀ニ建ス

彌刀神社 近江堂村ニあり延喜式出今天王と称ス

式所の生土神

門俣神社 鎌倉敷延喜式出門俣村

應神紀ニ門俣の和哥ニ所ニ

宇波神社 延喜式出加納村ニあり今熊野と称ス

式邑の生土神

長門守本村重成墓 上総国忠臣伝賞して墓を築る其石表ニ曰長門守本村重成之墓

上総伝 本村重成い豊臣秀吉公の近臣本村常陸助乃子ニ秀吉公ニ愛ス

於く沛生害の時父常陸助も亦来陣妙心寺ニ於く切腹ス常陸助の妻 後ニ豊臣秀頼公の乳母となり 重成を胎く已ニ故郷近江の馬淵ニ蟄居し

月満く重成を産たまふ 名家にして秀吉公ニ竹馬の朋なり 特ニ本村と同姓なれば

常陸助ニ好ミ重成五歳の時已ニ居城ニ招く寵愛せらる

年實子ニ如し 成長ニ従ひ軍学ニ武略練し 鞠畧を学び孫呉ニ

胸中ニ湧く 若年なり聰明叡智ありて武功世ニ高く忠肝義膽

の名将なり 称誉せり

本村自筆の書付に村長弓武ふあり其文云

此度人中上に拙生おゝ〳〵四人色中上に成人共方こゝ義兄はゝ
沿系寄ゆる宵年寄〳〵武度い拙意おゝ死と寄年長門
門十郎あゝ安行〳〵あかゝみゝ〳〵ふゝ〳〵遠りゆい平和義い四人お
義去ゝあゆ屋〳〵ゐを元こ四人拙こて女下い若十郎一義い山度こて女下い
婦君ゝ事一弥生新い拙生義も兄おゝ分ゝ元孫隠ゝ山世孫こ
義成ゝ義一人四ゐつゝ〳〵ゝ事ない旦度の孫〳〵れぬまゝ
形弟ゐゝ〳〵きすゝゐきはれて

一白

さゝみゝられやゐいてそ度いゐゝ〳〵きすゝ

一甲　一そ

一油さ入硯箱
一箸ノ番紙
義光ノ刀
日小根拵
金子

一鍋
一さ鍋
一包

ゝゝ毎日ゐ門十郎ゐ分に私ゝゝみのゝゐ義ゝ中い狂ゐゝ
仕宮ゐふ及紙筆ゝゝ〳〵膳ゝ

本村長門
五

元和元年ゐ又月ゐ

薄井利右衛門

伊豆守山口重信墓

村本村宅成の墓の十又間許ゐの方ふあり元和元年五月
六日暁天ゐ重成中ゐ紅合ゝ小戦敗ゐ但馬守多々良

弘隆墳　弘隆ノ墓石二隅亀跌ノ如ク碑額ハ篆ノ如ク碑額ハ篆額ハ石川丈山形ノ如ク

武蔵ノ国ノ武士ノ墓ノ碑銘ハ羅山子ノ撰ノ如ク

山口豆州牧碑銘

民部卿法印道春撰
参陽隱士石川丈山篆額

禮曰父母全而生之、子全而帰之、是孝也、又曰
戰陣無勇非孝也、二者不可得兼、捨生而取義
者也、元和元年攝州大坂之役、山口伊豆守重義
信、與父修理亮重政共副、別將井伊氏之先鋒、
到河州若江邊、五月六日昧爽、與寇相遇、父子
競進不避来銃、最初合鎗、短兵急接寇援其首、
重信亦戰没、從者共死、時年僅二十有六、可謂
戰陣者勇乎、嗚呼痛哉惜哉、重信舍弟但馬守
弘隆告之曰、如是旦纛裡掩覆之後立重信碑
于其死所、其姓氏山口、重政娶源雄
女、誕重信于尾州清洲、慶長二年重信八歳
始拜台德院大相國肉
左右、九年十一月十五日重信十五歳、隨俗例
初戎衣祝之也、十四年十二月命叙従五位
下獅伊豆守、十五年秋、於上野國賜采地十八
年春重政有故、忤旨、潛居武州入間郡河越龍
穏寺、重信從焉、十九年冬聞將有事于大坂而
父子欲往敢死、到筥根関吏不許過焉、乃帰寺、
重信又改名伴為商旅、於經東山道獲赴大坂、
時葉已和平、復東行、還寺、及翌年之戰也、夫
知

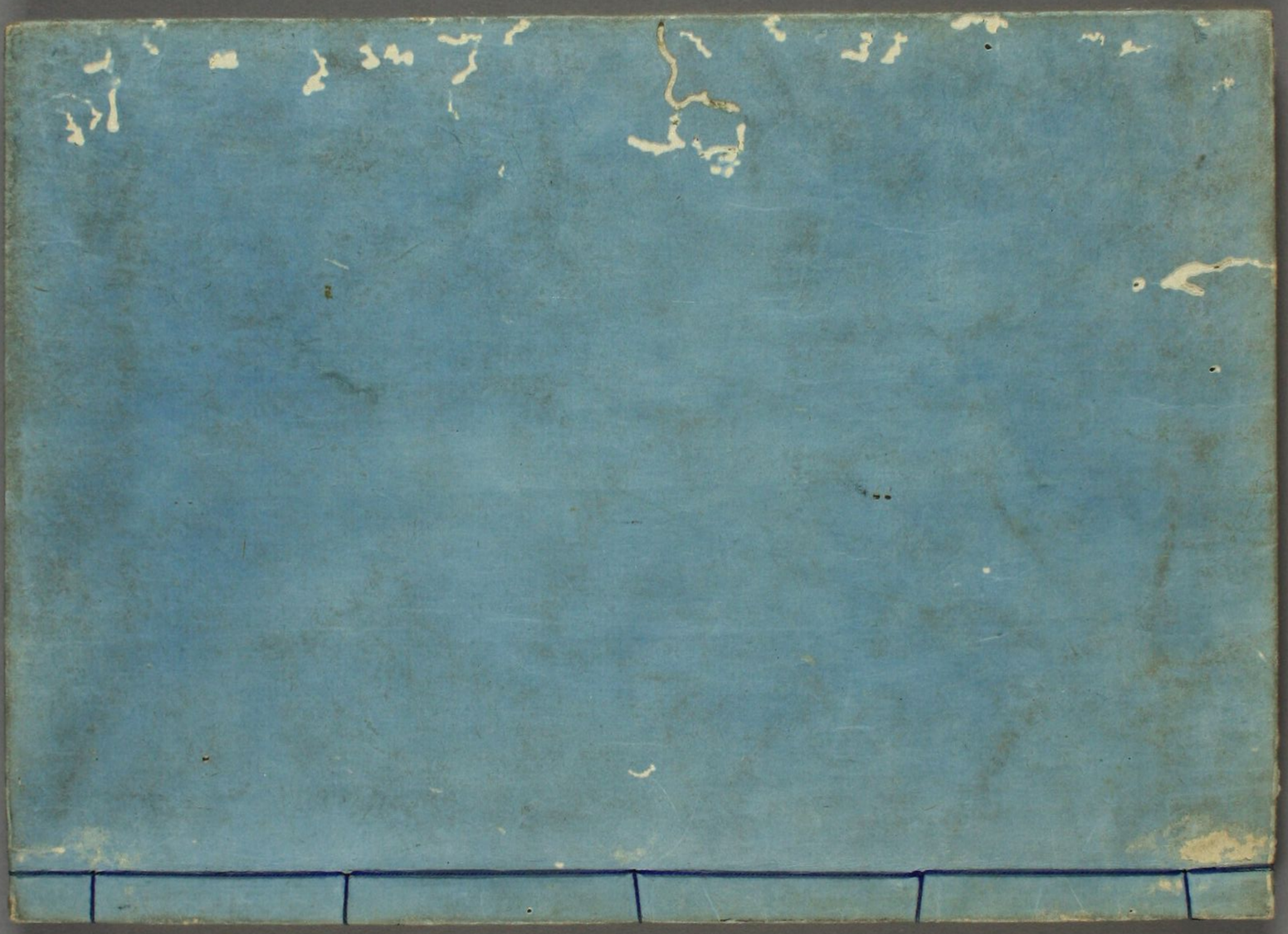
是、則與身體不毀傷、全而帰之者、雖以有以贊
然戰陣有勇則、不可謂非孝乎、古人求忠臣于
孝子之門、良哉嗚呼哀哉惜哉、其雅歸曰傑山
宗英居士、呼置其小影處曰大雅、弘隆屬余表
書其事于石、再三弗措於是為銘銘曰
吁浪連城　恃險聚兵　義旗一麾　有一勇士　重信為名
厥角如崩　先登揮戰　獲却敵頸　取義惟重
授命既輕　伊人雖沒　宛爾如生

正保四年丁亥五月六日

山口但馬守多多良弘隆建

稲葉里　玉井新田美江の間にあり

厚徳　立わすれい形くの里ふるさとくさくさの契りに結ぶ生ぬ　光隆

仲村神社　美江村にあり延喜式出三代實録云貞観九年二月授二官社
氏地の生土神とて例祭九月廿七日疱瘡流行の時のれい霊験
ありとて参詣する者多し

鴨高田神社　高井田長栄寺の境内にあり今八幡と称して氏村の生土神とす、
延喜式出例祭九月十六日氏寺年久しく、廣寺やぶれしを
寛延年中　菊孫　慈雲和上の建立なり